

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

由
豊

豊橋校区史

7

Yutaka







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 豊



上空から見た豊小学校（中日新聞社提供）

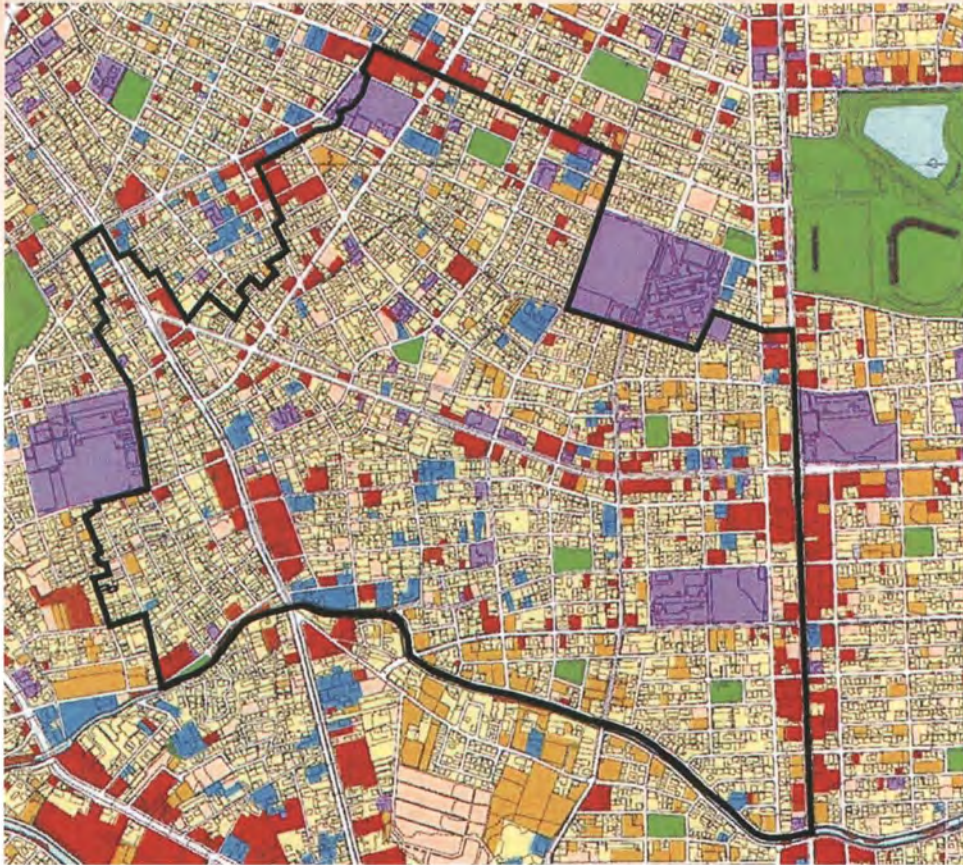


豊小学校20周年

豊岡中学校50周年

土地利用

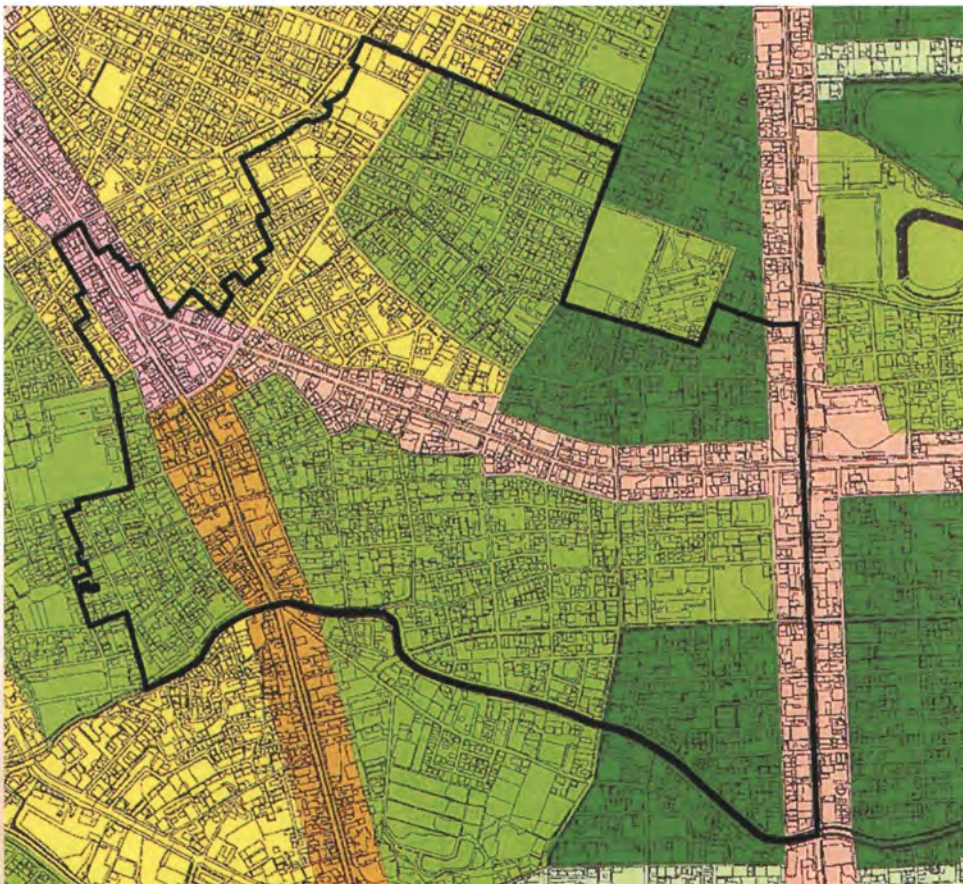
・土地利用現況図



凡 例

土 地 利 用		表 示	
自然的土地利用	農地	田	
		畑	
	山林		
	水面		
	その他の自然地		
都市的土地利用	住宅用地		
	商業用地		
	工業用地		
	公的公益用地	公益施設用地	
		その他の公的施設用地	
	道路用地		
	交通施設用地		
	公共空地		
その他の空地			
小学校区界			

・用途地域図



凡 例

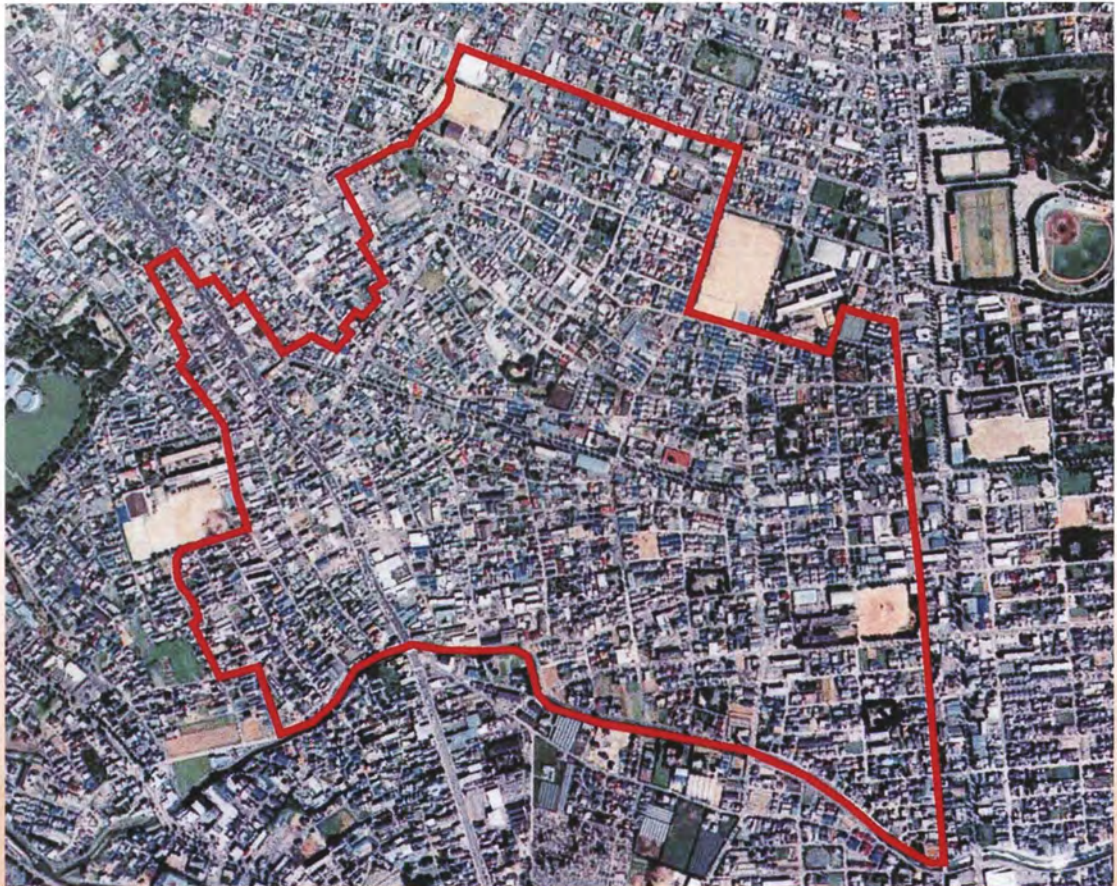
土 地 利 用	表 示
第一種低層住居専用地域	
第二種低層住居専用地域	
第一種中高層住居専用地域	
第二種中高層住居専用地域	
第一種住居地域	
第二種住居地域	
準住居地域	
近隣商業地域	
商業地域	
準工業地域	
工業地域	
工業専用地域	
DID区域界	
都市計画区域界	
小学校区界	

航空写真の比較

・昭和36年（1961）



・平成10年（1998）



公園に恵まれた豊校区



西の山公園



田尻前公園



横手公園



切替公園



春日公園



北春日公園

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
豊校区総代会長

安 達 武 至

豊橋は、明治39年8月1日に人口約3万8千人、面積約20平方キロメートルで、全国62番目の市として誕生しました。そして、平成18年8月1日をもって100周年を迎えます。

そこで、豊橋市総代会は、市制施行100周年記念事業の一翼を担い、校区史を発刊することになりました。この目的は市制施行100周年を機に、自分の生活する地域のなりたちや発展のようすなどを知り、地域を誇りに思い、愛し、育てていく気持ちをさらに高めることを願うからです。

ところで、豊校区は昭和54年、岩田校区から分離しスタートして、まだ30年も経っていない歴史の浅い校区です。

今回の校区史発刊に際して、校区の編集委員の方々には、歴史専門書を編集するのではなく、豊校区のあゆみを主体としながら、岩田をはじめ豊岡の歴史を踏まえ、現在の状況や将来像のわかる読み物として、工夫を凝らし、秘蔵写真や図版を取り入れたり、伝承や習慣・昔の生活の様子、地域の活動を取り入れた冊子として編纂していただくことをお願いしました。今回、その意を十分汲んで発刊することができたと自負しています。

最後に、本校区史発刊に際し、地域の方々にご協力を頂きましたことにお礼を申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 豊校区の概要 7
 - (1) 位置 7
 - (2) 周辺の状況 7
- 2 豊校区の住環境 8
 - (1) 土地利用 8
 - (2) 居住人口 8
 - (3) 公共交通 8
- 3 豊校区の自然環境 9
 - (1) 自然のようす 9
 - (2) 気候のようす 9

豊校区スポットライト 1 10

昔の豊校区は

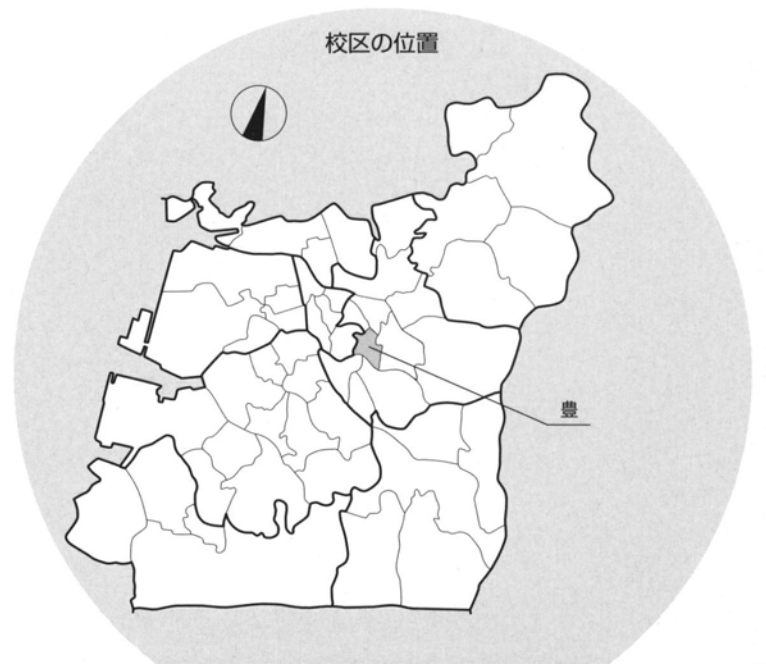
第2章 歴史と生活

- 1 豊校区のあゆみ 11
 - (1) 豊橋市の生い立ちと豊校区 11
 - (2) 土地区画整理事業と豊校区 13
- 豊校区スポットライト 2 14
- 波切不動教会
- 豊校区スポットライト 3 18
- 白山神社
- 写真で見る豊校区の歴史 19
- (3) 現在の豊校区 20
- 2 豊校区の産業 21
 - (1) 典型的な住宅地 21
 - (2) 産業の状況 21
- 豊校区スポットライト 4 22
- 七富士稲荷大明神
- 3 校区の活動 23
 - (1) 体育活動 23
 - (2) 子ども会活動 24
 - (3) 更生保護女性会活動 26
 - (4) 交通安全活動 27
 - (5) 防犯活動 28
 - (6) 消防活動 28
 - (7) 清掃活動 31
- 豊校区スポットライト 5 32
- 豊橋筆の沿革

第3章 教育と文化

- 1 豊小学校 33
 - (1) 昭和54年(1979)4月開校 33
 - (2) 豊小学校開校まで 34
 - (3) 「開拓魂」を合い言葉に 35
 - (4) 特色ある活動 36
 - (5) これからの学校教育 40
- 豊校区ヒヤリマップ 41
- 豊校区スポットライト 6 42
- 田尻原を切り拓いた人たち
- 2 豊岡中学校 43
 - (1) 昭和25年(1950)4月開校 43
 - (2) 校名の由来 44
 - (3) 特色ある活動 44
- 3 春日保育園 45
 - (1) 春日保育園の誕生 45
 - (2) 保育園の機能 45
 - (3) 定員 45
 - (4) 保育の内容 45
 - (5) 主な年間行事 46
 - (6) 特別保育事業 46
- 4 社会教育 47
 - (1) 豊岡地区市民館 47
 - (2) 豊校区市民館 49
 - (3) 社会教育委員活動 49
- 豊校区スポットライト 7 51
- 一閑陶苑はじめ窯
- 豊校区町総代一覧 51
- 参考文献・編集後記 52

校区の位置



第1章 自然と環境

1 豊校区の概要

(1) 位置

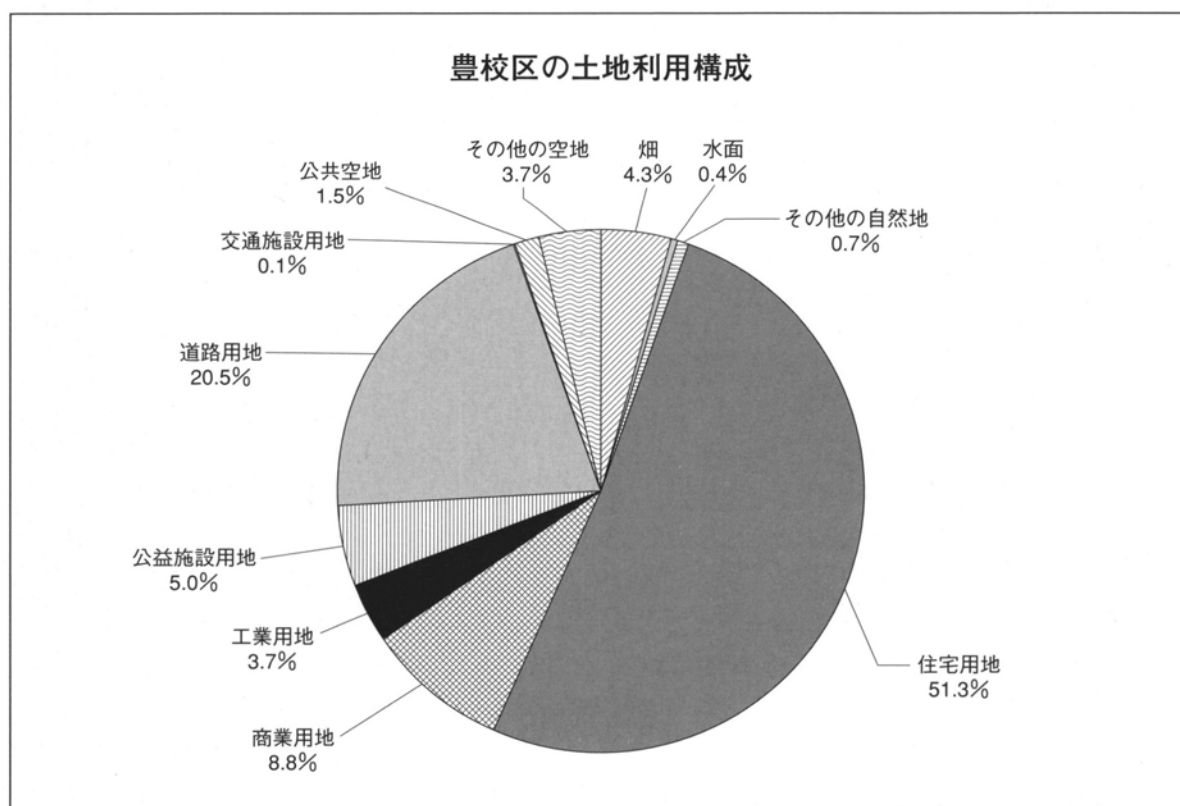
豊校区は、豊橋駅から東へおよそ3.5kmに位置し、市街地の東部の一角を占める典型的な住宅地である。東には岩田・多米の両校区を挟んで静岡県境との間にそびえる弓張山系を、また、北方面には赤岩や石巻山を望むことができ、変化にとんだ遠景を楽しむことができる。さらに、航空写真からは、整然とした街並みの本校区が比較的ゆとりを持った住宅地であることがうかがえ、住みよい住環境を持った地区であることが分かる。

(2) 周辺の状況

本校区は、そのほとんどが、三ノ輪、向郷^{むかいごう}、岩田第一土地区画整理事業によって計画的に整地され、人々が定住した地域である。

中でも、昭和43年度（1968）から51年度（1976）に施行された岩田第一土地区画整理事業は、この地域の様子を一変させた。農村地域から住宅地域への移行は人口の急速な増大を促し、本校区を含む周辺地域一帯が、現在の良好な住宅地となった。

近隣には、「東海の尾瀬」と呼ばれる愛知県内最大の湿地帯「葦毛湿原」や、テニスコート・球技場・市民球場はもちろん、桜や柳、



資料：豊橋市都市計画課 平成16年度（2004）都市計画基礎調査

あじさいなど四季を通じて市民の憩いの場として親しまれている岩田運動公園、あるいは市民文化会館（大池公園）といった、自然・スポーツ・文化それぞれの分野で本市を代表する施設がそろっている。そのほか、中心市街地や豊橋駅へも車を使えば、10分程度で行くことができる利便性の高い校区である。



市民の憩いの場 岩田運動公園

2 豊校区の住環境

(1) 土地利用

校区面積107.42haの全域が市街化区域となっており、土地利用現況図からは道路用地や公益施設用地などを除けば、そのほとんどが住宅用地であることが分かる。用途地域の指定状況を見ても、校区全体のほぼ全域が住居系の用途地域に指定されている。（P2.「土地利用現況図」及び「用途地域図」参照）

商業用地は、国道1号線や校区の中心を東西に走る都市計画道路岩崎町線、あるいは校区の東端を南北に走る同外郭線といった幹線道路の沿道に商業施設が目立つ程度である。

工業用地も、住宅にまぎれていくつか点在しているが、騒音や悪臭を放つ大きな工場が立地しているわけではなく、商業施設ともども大規模なものはない。

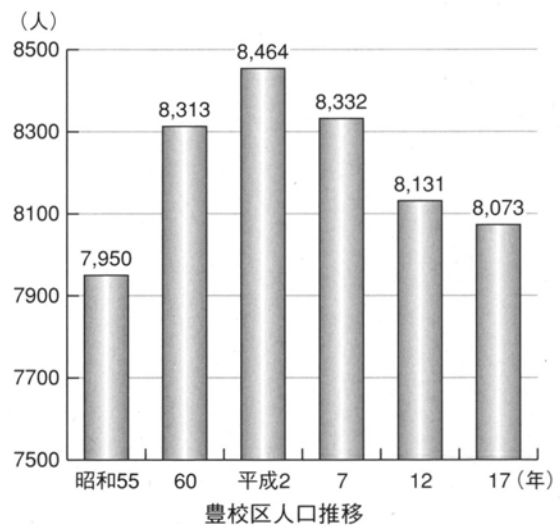
一方、3本の幹線道路のほかは、ほとんど

が生活道路として整備されるとともに、校区内には6か所の街区公園（西の山公園・田尻前公園・横手公園・切替公園・春日公園・北春日公園）が整備されており、静かで暮らしやすい住環境が保たれている。

(2) 居住人口

本校区の人口は、平成12年（2000）の国勢調査によると8,131人で近年はほとんど増減がなく安定している。

しかし、前述したように農地も空き地も少なく極めて良好な住宅地帯ということもあって、本校区の人口密度は75.7人/haで、校区別では、東田校区に次いで第二位となっている。



(3) 公共交通

校区の西部を日本の大動脈である国道1号線が走っている。全体的に静かな住宅地である本校区内で、唯一異彩を放っている。

国鉄バスが、この国道1号線を浜松方面へ向けて走っていたのは随分昔の話。交通事情の変化で、路線は縮小され、分割・民営化でJRバスとなっても走り続けていたが、ついに撤退してしまった。しかし、そのあと、豊鉄バスが引き継ぎ、元気に走っているのはう

れしい限りである。

その豊鉄バスが岩田団地から豊橋駅へ向けて走らせている路線が校区の中心を通り抜けている。本校区民にとっては貴重な足である。元は市内循環線として校区の西のはずれをかすめて通るだけの路線。これに申し訳程度に日に何本かが校区内に足を延ばしていただけたバス路線であった。それが岩田団地というニュータウンの完成で路線を大幅に充実させ、使いやすい身近な交通機関として定着した。



校区内を走る豊鉄バス

もうひとつ忘れてはならないのが、豊橋市のシンボルである路面電車、いわゆる「市電」である。路線は豊校区を通らず、従って、停留所もないが、「運動公園前」は豊校区から至近距離にあり、また、途中の「競輪場前」も春日町北部からはバス停よりも近く、運賃も安いと、利用しやすいという利点がある。

運動公園前から井原までの0.6kmが開通したのは、昭和57年（1982）。全国の路面電車が車社会から邪魔者扱いされて、廃止を余儀なくされていく中、延伸運行された。

近年、環境にやさしい乗り物として見直され、新たな電停の設置や新型車両の導入など利用促進に向けた動きが進んでいる。

これからも地域住民の貴重な足として大切に守っていききたい。



市電「運動公園前」

3 豊校区の自然環境

(1) 自然のようす

本校区は良好な住宅地である反面、自然的な環境には乏しい。土地利用現況上も自然的土地利用が占める割合は、全体の5%程度でしかない。校区内は高低差がほとんどなく、きつい坂もなければ、崖もなく山も丘陵地もない。また、山林も池もない。

校区の南の境界には山中川が流れているが、シンボルとなるような自然環境も池もない。ただし、そのお陰で台風や大雨による災害の心配のない地区だともいえる。

(2) 気候のようす

豊橋市の気候と言えば温暖のひと言につきる。真冬でも雪はほとんど積もらない。一方、遠州灘一帯は風が強く、それが冬場の体感温度を低くしているのが難点である。とはいえ、それらを割り引いても暮らしやすい気候であるといえる。

本校区は市中心部に近いため、この豊橋市の気候の特色がそのまま当てはまる。それゆえに、都市型気候の影響を受け始め、かつてに比べると、夏の夜は寝苦しくなり始めているよう気もするのだが・・・。

豊校区スポットライト 1

昔の豊校区は

○ あれっ！いつの間に？

昔から知られていた種が、気がついたら外来種に入れ替わっていた。生態系の変化で植物や昆虫の世界ではこんな例も珍しくはない。農村地域から住宅地域へと変化した本校区の中でも確認できた植物がある。

それは、セイヨウタンポポとアカミタンポポである。春の草花として親しまれているキク科の植物であるが、在来種はほとんどがトウカイタンポポで、一部にシロバナタンポポが見られた。



トウカイタンポポ

セイヨウタンポポ

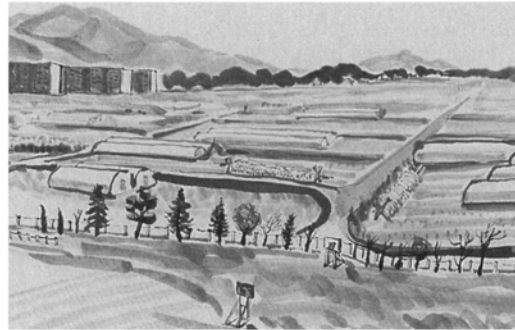
戦前から始まり、昭和40年代以降に本格化した区画整理事業による環境の変化の影響を受けたのか、平成17年（2005）に豊校区内のほぼ全域を現況調査した結果、在来種はほとんど姿を消し、外来の2種に入れ替わっていたという事実が研究者によって確認された。

○ 戦前はこんな風景も…

▲ 旧東海道

戦前の東海道（現在の国道1号線）の三ノ輪以東では道路の両側に高さ1～2mの土堤があり、クロマツの大木が並木状に連なっていた。

現在、土堤は完全に姿を消し、松並木も本校区内では見る事ができない。一方、沿道には瓦の製造所も点在していた。瓦の原料である粘土採取場や粘土を運搬する牛車の姿も見られた。



豊岡中学校南展望（昭和40年代）
「豊岡今昔」より

▲ 西の山池

現在の豊岡地区市民館付近にあって、通称「ピストル池」と呼ばれていた。水はほとんどなく、ピストルの形をした水たまりがあり、一部は瓦礫の捨て場と化していた。



三ノ輪や飯村町には多くの瓦、窯業が盛んであった。（昭和30年代）

「豊岡今昔」より

▲ 桑畑

三ノ輪町から岩田小学校への通学路は向郷（現在の春日町）、田尻（現在の西岩田）を経る道で上道と呼ばれていた。桑畑が広がり、子どもたちはこっそり桑の実を食べた。また、蚕を飼い、繭から蛾が誕生するまでを楽しんだともいう。

製糸の町として栄えた頃の豊橋の姿が本校区でも見られたようである。

第2章 歴史と生活

1 豊校区のあゆみ

(1) 豊橋市の生い立ちと豊校区

① 歴史の浅い豊校区

豊校区は昭和54年（1979）に岩田校区から分かれて誕生した歴史の浅い校区である。

現在は、西岩田（一丁目～六丁目）、春日町（春日町一丁目・二丁目、仲ノ町、伝馬町）、三ノ輪本町（三ノ輪町一丁目、伝馬町）、三ノ輪二区（三ノ輪町二丁目～四丁目）、三ノ輪三区（三ノ輪町五丁目、三ノ輪町三ノ輪）の5町から成り立っている。

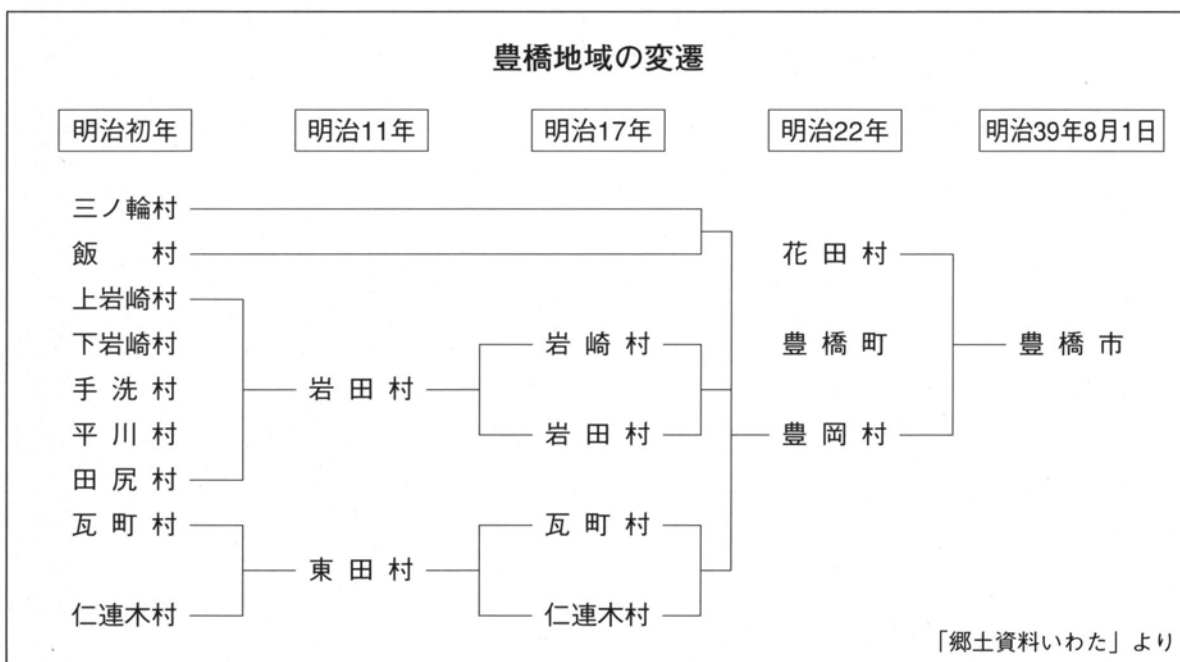
分離前の豊校区は春日町・三ノ輪地域を除けば、もとは田んぼや畑が広がる田園地帯であった。昭和40年（1965）代に入って西岩田一帯の開発が進み、住宅地域に変ぼうしていったが、当時はまだ岩田校区に属していた。

② 岩田村の誕生

そこで、豊校区の前身である岩田校区の歴史をひもといてみる。

明治11年（1878）の町村合併により、上岩崎村、下岩崎村、手洗村、平川村、田尻村の5か村が合併して、岩田村となり、ここに初めて、岩田という地名が登場する。

延宝（1673～81）年代までは、上岩崎・下岩崎・手洗の3か村を岩崎と称していた。平川・田尻の2か村は飽海の庄に属していた。隣接して、飯村・赤岩村・多米村・瓦町村・仁連木村があったが、明治11年、瓦町村と仁連木村が合併して、東田村と改称された。また、岩田村は、明治17年（1884）には、岩崎村と岩田村に分かれた。



③ 豊岡村誕生

町村の合併で次第に行政改革が進む中、明治22年（1889）、各地で村の合併が行われた。岩崎村・岩田村と隣接している仁連木・瓦町・飯村・三ノ輪の6か村が合併して、豊岡村が誕生した。

④ 豊橋市誕生

町村合併で大きくなった村には、村長も置かれるようになった。それに伴い、教育や徴税に見合った地域規模が求められた。しかし、江戸時代から引き継がれた自然集落は、その規模に及ばなかったため、明治39年（1906）8月1日、豊橋町・花田村・豊岡村を廃して市制を施行した。

ここに愛知県下で2番目、全国62番目の豊橋市が誕生した。明治21～22年（1888～89）に行われた合併は、明治の大合併と言われ、全国に7万1千余あった町村が1万5千余の市町村に再編された。

⑤ 寒村だった現在の豊地域

明治当初の豊校区一帯は、「地質と土性は若干異なれど、秩父古成層よりなる礫質粘土層で土性肥沃ならず。全村を通じて佳良ならずして、水路屈曲多くして排水便ならず」（豊岡村是）と記されている。

つまり、住宅が立ち並ぶ現在の豊校区とは想像もつかない寒村の様相を示していた。

このような状況の中でも、江戸時代の半ば、



寛延年間（1748～51）のころには、岩田5か村で150戸余の戸数があったと、昭和59年（1984）3月に発行された岩田小学校の郷土資料「いわた」に記載されている。

春日町は、江戸時代初頭以降、新切と向郷と言われた。仁連木の庄家丸地氏が所有していた山野（現在の春日町一帯）を今泉八良兵衛が借りて、芝切（開拓）を行ったという。今泉八良兵衛がなくなったのは、貞享2年（1685）であるので、江戸時代初期には、すでに開拓が始まっていたと推定される。なお、この地は今泉国一氏の資料によると新切と言われていた。

三ノ輪地域は、「古時より三ノ輪と称したが、人家は一戸もなく、明治2年（1869）頃から旧豊橋藩士族、80名余が住居を構え、一村を開き、三ノ輪村と称した」と、豊橋市史（第8巻17P）にある。

この豊校区一帯は、当時、小さな農村ばかりで、農作道も不十分で、交通の便も悪く、岩田村も三ノ輪村もともに三河の国渥美郡に属していた。

平川村	18軒	三ノ輪村	54軒
田尻村	60軒	上岩崎村	41軒
手洗村	6軒	下岩崎村	20軒

「とよおか誌及び豊橋市史より」

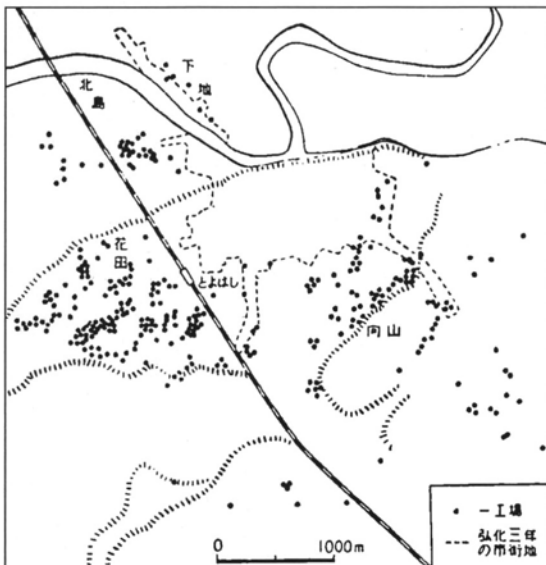
⑥ 蚕都・軍都豊橋

明治中期までは、豊橋の産業としては、煙草と生糸と玉糸の製造が中心であった。

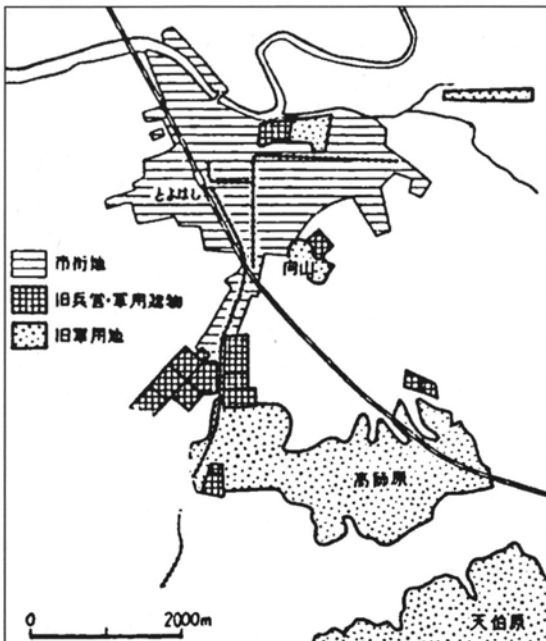
ところが、明治37年（1904）、煙草専売法が実施されると、煙草製造は民間から姿を消して、製糸業がとってかわった。製糸業は終戦前まで市の代表的産業の地位を占め、「蚕

都豊橋」といわれ、全国に知れわたった。

明治18年（1885）、歩兵第18聯隊が吉田城址に配置された。それとともに、町には電灯がとまり、官庁や学校、会社や銀行、病院や薬局、旅館や商店など日ましに装いを新たにした。また、明治41年（1908）には、豊橋に第15師団司令部が開庁されると、高師村、牛川村周辺の田畑や原野林は軍用地として整地されていった。



製糸工場の分布（「地方都市の研究」より）



旧軍用地（「地方都市の研究」より）

第一次世界大戦後から太平洋戦争終了まで、師団の廃止や部隊の編成替えなどで、軍都豊橋も変ぼうするが、愛知大学、時習館高校、豊橋商業高校などは、軍関係の施設として利用された。今日、自衛隊の射撃場として現存する高山の射撃場もその名残である。

(2) 土地区画整理事業と豊校区

① 開発の遅れた豊岡地域

昭和に入り、豊橋市は新しい近代都市化を目指し、着々と計画を進めていった。駅周辺は、旅館、商店、寄席などの娯楽場が繁盛し、市中は日ごとに活気がでてきた。また、富本町から小池町にかけては、将校用の下宿、兵士用の食堂、酒屋などが軒を並べ、兵士とその家族でにぎわった。

しかし、そんな町のにぎわいは、この豊岡地域にはほとんど影響はなかった。土地はやせて、収穫も十分ではなく、農閑期には貧しい人々は出稼ぎにいて生活を支えていた。

② 荒地を拓く

空襲の焼け跡の中で、戦後が始まった。食糧不足や物価高からの出発であった。このような状況の中、豊橋の戦後復興計画も軌道に乗り始め、軍用地、練兵場などが開拓地として利用された。岩西地区の開拓をはじめ、県下の開拓地として注目を浴びたのが、高師原・天伯原の広大な旧軍用地であった。

現在の豊校区周辺では、昭和2年（1927）に東田土地区画整理組合が設立され、昭和17年（1942）に工事が完了した。

続いて、東部土地区画整理組合が設立され、昭和4年（1929）から昭和15年（1940）の間に完了している。さらに、仁連木土地区画整理事業も、昭和8年（1933）から昭和21年（1946）の間に完了した。

その後、昭和14年（1939）、三ノ輪土地区画整理事業が計画された。その時、向郷（現在の春日町）にも計画参加の呼びかけがあったが、不調に終わり、三ノ輪町二丁目まで整理が行われ、昭和34年（1959）に完了した。

向郷は瓦町の土地区画整理が計画された時も、呼びかけを受けた。しかし、これも不調に終わり、仲ノ町まで整理が行われ、向郷は取り残されてしまった。

③ 高まり始めた土地区画整理

向郷一帯は、道路も狭く、排水も悪く、雨が續くと、道は水路と変わった。また、火災

が発生すれば、消防車も入れなかった。これから町内へ新居を構えるようになると、区画整理は一層難しくなることが予想された。

こうした状況で、昭和30年（1955）ごろより、土地区画整理への気運が高まり、準備委員会が発足した。

④ 協力的な地主

準備委員会は、組合施行の先進地、春日井市を視察し、似たような条件である本校区の事業計画に意を強くして進めていった。

土地区画整理事業は順調に進んだが、この整理事業では、いくつかの難題があった。例

豊校区スポットライト 2

波切不動教会

波切不動教会は、春日神明宮の横側駐車場と道路を挟んだ向かいにある。

春日町との関わりは、春日町の前身「向郷」が区画整理事業により「春日町」として発足した時、起工式を執り行ったことが縁である。

当時の春日町は、見渡す限りの田畑であり、平成の現状からは想像し難い風景であった。その頃は電話も普及しておらず、教会にあった電話が役所との連絡に使用された。おかげで、先代主管者は呼び出しに東奔西走して大変だったという。

宗派は、平成16年（2004）に世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の「吉野・大峯」の地、桜で有名な吉野山の中心にある「金峯山修験本宗、総本宗、金峯山寺」の末寺院であり支局である。

当教会は、祈禱寺院であって、ご本尊は、四国の36番札所青龍寺より迎えた波切不動明

王尊である。

行事として、御本尊の月例祭は28日、大祭は10月28日、行者尊の月例祭は7日に採燈護摩供を修法している。また、正月には修正会、節分には星祭、夏には大峯山上ヶ岳の入峰修行なども実施している。

今では、地域の方々に「お不動さん」古くは「新切の不動さん」と親しまれている。



波切不動教会

えば、2箇所の公園設置や公民館、神社の建設用地の確保、また、今まで集会所、遥拝所ようはいじよはあったが、借地であり、取り壊さなくてはならなかった。さらに、道路敷設に墓地の一部を通るという難問が立ち上がった。

いくつかの難題に土地区画整理事業委員は地主との粘り強い交渉のすえ、地主の土地無償提供や墓地の全面移転など、昭和36年(1961)1月、了解を得ることができた。

⑤ 田原町から護国神社払い下げ

昭和30年代、小中学校の鉄筋化が進められていた。向郷と岩西は小沢小学校の校舎の払い下げを受けることになった。玄関付の校舎は向郷が受け、公民館とすることにした。校舎の解体から建設まで町民の労力奉仕で行われた。建設が順調に進んでいる時、東海日日新聞に、田原城跡内の護国神社神殿払い下げの記事が報道されたため、早速申し込んだ。

しかし、すでに三重県に払い下げが内定していた。そこで、故上村千一郎代議士の尽力と愛知県の県内優先という決断で、田原町(現在の田原市)が受けることとなった。

昭和36年(1961)11月19日、田原から譲り受け、今日の春日町公民館、拝殿、神殿、庚申堂こうしんが完成した。



春日町公民館

⑥ 春日神明宮

春日町内の氏神は、田中の神明宮、伊勢の分神天照大神が祭られている。豊橋東部は伊勢神領であった。天文22年(1553)田中の神明宮の社殿建設には、仁連木城主もかかわったとされる。田中の神明宮は仁連木地域の氏神であった。

ところが、田中の神明社が春日町から遠いということで、神明宮の遷宮の折り、拝殿の一部の払い下げを受けて、現在の公民館の位置に遥拝所を建立して拝していた。その後、田原より譲り受けた神殿へ田中の神明宮社から分神を受けて、春日神明宮として氏神様を祀ることとなった。



春日町開拓起工式

⑦ 春日町誕生

今日の春日町が誕生するまでには、次のような紆余曲折があった。

春日町一帯は、江戸時代当初から仁連木村の庄屋丸地氏が所有しており、明治時代には三河国渥美郡仁連木村に属していた。明治5年～9年(1872～1876)に行政区画が実施され、仁連木一帯は第15大区と位置づけられた。

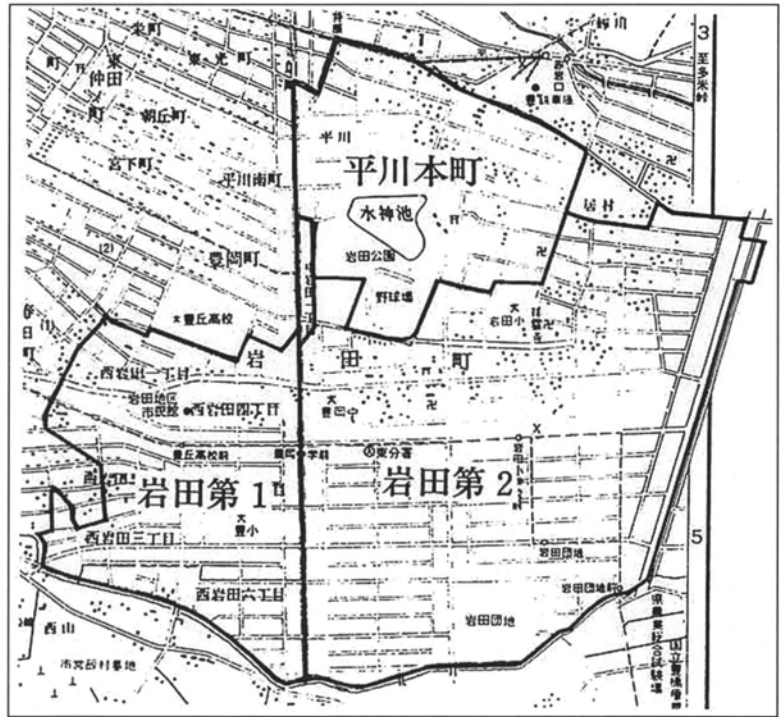
明治5年(1872)10月の地券取調によると、仁連木村には向郷、三ノ輪、井原、舟原など、30あざの字があり、現在の豊、岩田、東田、向山校区という広範囲に及んだ。

その後、いくつかの町村編成を経て、明治

ガス配管の各戸引き込み、さらに組合事業としては画期的な地域のコミュニティー作りの場としての地区市民館の建設等であり、住民のための良好な環境に配慮したまちづくりがなされた。

この事業は、住民参加のまちづくりとして、高く評価され、昭和50年（1975）までの7年余の歳月を経て完工した。ここに生活環境の整備された新町が誕生した。

新町は西岩田一丁目から六丁目までで、整然と区画された明るく住みよい住宅地帯に生まれ変わった。



岩田第一土地区画整理事業「郷土資料いわた」より

⑨ 岩田第二土地区画整理事業

豊岡地区では豊岡中学校より東側、岩田小学校より南側の地区で、岩田第二土地区画整理事業が、昭和45年（1970）から昭和53年（1978）まで実施された。

「岩田第一」と同様に住民の環境整備が施された開発事業であった。岩田第二に次ぐ、3番目の事業が、昭和48年（1973）から昭和56年（1981）まで続いた平川本町の整理事業である。この事業の特色は、宅地造成の他に

野球場、球技場、テニスコートなどを備えた総合運動公園の造成であった。

⑩ 由緒ある白山神社

明治初年（1868）ごろまでは、現在の三ノ輪町は渥美郡三ノ輪村として、渥美郡に属していた。当時、住んでいる人もごくわずかで、ほとんどが農民であった。閑散とした地域であるが、三ノ輪町にある氏神様として親しまれている白山神社は、古い歴史を持っていた。

白山神社は、豊校区の西部を走る国道一号線を挟む三ノ輪町のほぼ中央にある校区唯一の神社である。

毎年10月の第2土・日曜日には、三ノ輪町全域の「平成まつり」を神社の一角を借り受けて実施している。この祭りは、町内の安全・親睦・敬愛をめざして行われ、地域の方々も楽しみにしている行事である。



岩田運動公園（テニスコート）

豊校区スポットライト 3

白山神社

1. 言い伝え

白山神社には、昔から言い伝えがある。

「平安時代、桓武天皇（781年～806年）の第四王子である戒成親王は、在京中に不治の病にかかれ、占いにより、病を治すために、関東にくだるおり、この三河の地にきて、重病になられ、延暦16年（797）11月11日に帰幽され、三ツ塚（現向山町三ツ塚）に御遺物を納めた。そして、嵯峨天皇の時、弘仁8年（817）、親王の従者「紀ノ平太」に親王の宗廟を「白山大権現」として社を建立せよと勅命がくだされ、当神社が建立された」という。明治元年（1868）の神仏分離令により、「白山大権現」は「白山神社」と改名された。

2. 愛知県の神社財産

この白山神社は、祭神が戒成親王であり、愛知県に神社財産として登録されている。神社拝殿は、昭和31年（1956）に御遷宮が済み、末社は平成16年（2004）10月に遷座祭が挙行され、諸神様も新しい神殿に鎮座され、町内を守護している。

各地に同名の神社があるが、神話の中に一番最初に登場する夫婦神として知られている伊邪那岐命・伊邪那美命が祀られ、夫婦婚姻の初めとか結婚の神などといわれている。



白山神社

3. 仙気の神

仙気の神が祀られているが、祭神はない。「小牧の仙気の神」と呼ばれる霊験石の存在を聞いた三ノ輪の氏子が大正末年にこの霊験石の一部を貰い受け、白山神社に小さな祠を造り、そこに安置した。この霊験石は、腰の痛む箇所をなざると不思議に痛みがなくなるという霊験のある神様である。



仙気の神

4. 天皇に縁のある神社

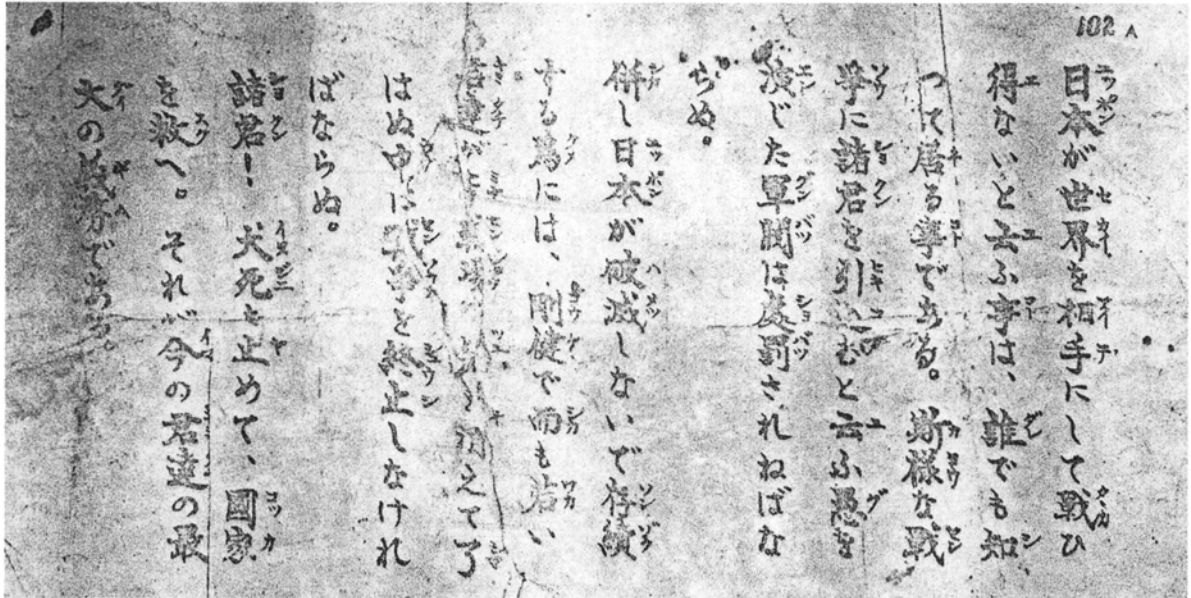
白山神社は、かつては大きな社域を持っていたと言われており、桓武、嵯峨、仁明、村上など諸天皇と縁のある神社である。なお、白山神社に関する氏子行事としては、毎年大晦日に「除夜祭」が行われ、正月には元旦祭の行事が行われる。

5. 平成まつり

「平成まつり」は、白山神社の御神体を奉る祭りではなく、全三ノ輪町の住民が全員で盛り上げた町の祭りであって、白山神社が町の中央に位置することと、町民が集まりやすいところから、神社の一角を町民が利用させてもらっている。

なお、毎月1日には、神社の清掃奉仕が続けられている。

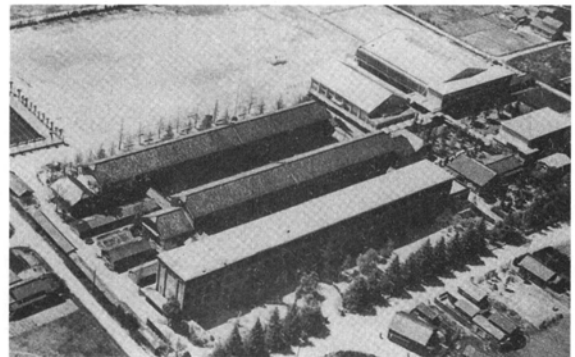
写真で見る豊校区の歴史



昭和20年（1945）当時B29が豊橋上空からまいたビラ（武田さん所有）



昭和39年（1964）オリンピック聖火リレー通過
豊橋市三ノ輪町二丁目付近



昭和36年頃（1961）の愛知県立豊橋東高校付近
「向山東町20年のあゆみ」より



昭和30年代（1955）頃の山中橋付近（豊橋市三ノ輪町五丁目）

(3) 現在の豊校区

① 豊校区誕生

昭和50年（1975）代に入ると、宅地造成が進む岩田校区は環境整備も施され、多くの住民が移り住んできた。昭和53年度（1978）には、岩田小学校も1,800余人の児童を受け入れなければならない大規模校となった。

昭和54年度（1979）、豊橋市の大規模校解消推進の中で、岩田小学校から分離して「豊小学校」が開校した。それとともに、校区も「豊」と決定された。

当時、校区が分離するにあたり、学校と校区名をどうするかということで、住民に公募した。その結果、

1. かつてこの付近は、豊岡村と言われていた「豊・とよ」を受けたこと
2. 「豊」はものごとが盛んで、満ち足りていること
3. 活気に満ちた豊橋のシンボルとも言われるゆたかに流れる豊川の「豊・とよ」にちなんで「豊校区」と名称された。

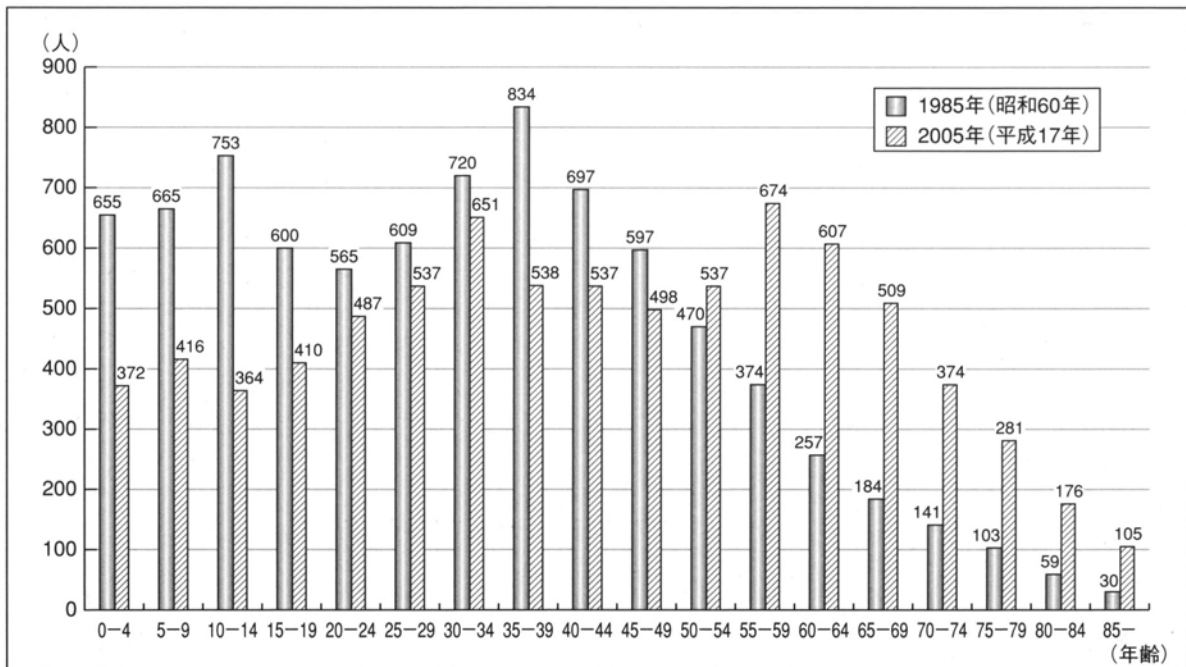
② 高齢化社会を迎える豊校区

住宅地として発展した豊校区は、岩田校区から分離した当時と、ほとんど人口の増減に変化がない。しかし、年齢構成では、ピラミッド型が崩れ、50～60代層がふくらみ、次第に高齢化社会の兆しが見え始めている。

わが国は、すでに65歳以上の世代が、5分の1を超す高齢化社会であり、2015年には、4人に1人以上が65歳以上になる。豊橋市制施行100周年を機に、高齢者が、住み慣れた地域社会の中で健康で生きがいを持ちながら、安心して生活ができる豊校区の実現を目指していかなければならない。

そのためには、今後、校区一丸となって、次のような新しいまちづくりに取り組むことが急務である。

- 1 自然環境を維持しながら、効率的な交通ネットワークの整備による、ゆったりと安心して暮らせる快適なまち
- 2 地域に根ざした諸活動を進め、地域住民が参加する温かい交流に支えられた暮らしのできるまち



豊校区5歳段階人口推移

2 豊校区の産業

(1) 典型的な住宅地

豊校区は分離以前の岩田校区の時代までさかのぼり、さらに、区画整理施行前まで時計を戻し、「さて、本校区の産業は？」と問われれば、農業と答えるのが妥当であろう。

とにかく、田んぼや畑が広がり、その中のため池が点在する農村地帯。現在の西岩田はそのほとんどが農村風景で占められていた。また、豊岡中学校の窓から南方面を見渡せば、現在の東部中学校付近まで一面の田園風景が広がり、その中を通う生徒の姿など、はるか遠くまで見渡すことができたのである。

しかし、現在の本校区の産業について論じようとするのは、かなり無理がある。もはやかつてのような農村地帯でないことは誰の目にも明らかであるが、かといって、商業地域とは言い切れず、ましてや工業地域であるはずもない。

豊橋市における校区別の人口密度で上位に位置する本校区は、典型的とはいえないまでも、代表的な住宅地域なのである。



校区の境を流れる山中川

(2) 産業の状況

① 幕を閉じた農業

校区内にはまれに畑が見られ、また、古くからの家には農家の面影が見出されることも

あり、農業が全く行われていないとは言い切れない部分もあろう。しかし、本校区内で、その風景を見る機会はほとんどなく、農業としての歴史はその幕を閉じたと言える。



昭和18年頃（1943）の三ノ輪町二丁目付近



昭和60年頃（1985）の三ノ輪町二丁目付近

② 少ない商工業

校区内には、若干の工業用地があるものの、中小規模の食品、建材等の工場であり、本校区の工業の歴史として見るには無理がある。

残るは商業である。純粋な住宅地域であり、校区内も生活道路が中心であるため、商店が位置する場所も幹線道路沿いである点が特徴である。

③ 幹線道路沿いに商業用地

校区内を走る幹線道路はわずかである。校区内の西はずれを南北に走る国道1号線、校区の中心を多米方面に抜ける都市計画道路岩

崎町線、それと校区の東の縁を牛川から飯村に抜ける同外郭線の3本がそれぞれあり、他に若干の準幹線とも言える道路はあるものの、その他は生活道路である。商店が顔を見せているのは、これらの幹線道路沿いの商業用地がほとんどである。

国道1号線沿いには、車のディーラーやファミリーレストランをはじめとする飲食店など、一定規模の華やかさで目立つ存在が多い。

しかし、校区内での国道1号線の距離はそれほど長くないため、これが校区を代表する商店の顔とするには無理がある。他の幹線道路沿いでも、商店や喫茶店をはじめ、飲食店が目立つ。コンビニや中規模の食品スーパー・ドラッグストアもあるが、大規模小売店舗と呼ばれる大型スーパーはなく、静かな商戦が繰り広げられている。



国道1号線沿いの商店

④ 地域に密着した経営姿勢

都市化された住宅地域ということから、最近になって目立つのが大手資本による学習塾。幹線沿いに立地する幾つかの塾の前では、毎夜のように子を送迎する車の列が帯をなしているが、こんなところにも時代の移り変わりを感じさせている。

いずれにしろ、本校区では住宅地域における商業という、地域に密着した経営姿勢のようなものが見受けられる。

豊校区スポットライト 4

七富士稲荷大明神

三ノ輪地区の真ん中を走る国道一号線沿いの西側に七富士稲荷大明神が祀られている。

三ノ輪地区は、明治維新（1867）の際、当時の吉田藩から新居の関所に勤めていた42家の士族らに下賜された地区であった。しかし、明治末年（1912）までは、福岡、尾崎、鈴木姓の3軒しかなく、東海道筋にも七富士稲荷にかけて長い土塀があった。

七富士稲荷は、その42家の士族らによって祀られたもので、当時の社領は7畝（210坪・700㎡）の広さがあった。東海道筋の古くからの住民たちの間にはこの七富士稲荷と町民の氏神である白山神社との合祀の話が持ち上がったが、紆余曲折の末、三ノ輪地区の一角に分社されることとなった。

この七富士稲荷大明神の鳥居の横にある青い自然石に歌が彫ってあるが、この石も当時の士族の屋敷から移されたものと言われている。

祭礼は、毎年11月23日に奉賛会の会員が集まって、盛大に催されている。



七富士稲荷大明神

3 校区の活動

(1) 体育活動

① きっかけは家庭婦人バレーボール

豊校区の体育活動は、社会体育委員が担当し、現在、老若男女が参加できる年間行事として、下記のような種目を実施している。

月	種 目
6	インディアカ
9	校区体育祭
1	ウォークラリー大会
2	キーンボール

これらの競技が始められたきっかけは、昭和41年（1966）10月10日「体育の日」の記念行事として開催された家庭婦人バレーボール大会であった。そのため、当初はバレーボール、ソフトボールなどが主流であったが、時の流れとともに新競技の登場もあり、その都度、体育委員が研鑽し、校区民の健康、親睦を念頭に置いて選別している。

② 体育大会の変遷

昭和43年（1968）になって男子壮年ソフトボールが開催されているが、その後岩田校区から分離された豊校区としての参加は、昭和53年（1978）4月の春季ソフトボール大会である。以後、次のような変遷がある。

年 月	種 目
昭和53年9月	第1回豊校区運動会
昭和53年11月	秋季ソフトボール大会
昭和54年2月	豊丘高校でバレーボール大会
昭和59年7月	ナイターで今泉杯ソフトボール大会
平成4年	ナイターを中止し、春・秋のソフトボール大会、インディアカに変更
平成5年	秋のソフトボールを取りやめ、ソフトバレーに変更

年 月	種 目
平成12年	豊橋総合動植物公園で行う秋のウォークラリー大会を新採用
平成17年	キーンボールを新採用

これら校区行事のほかに、豊橋市総合体育館完成披露の際の体育協会発足記念として、「市民参加によるスポーツを楽しむ」ことを目的に平成元年（1989）から始められたバレーボール、ソフトバレーにも参加して、大勢の校区民に楽しまれた。

なお、昭和53年（1978）9月に第1回が開催された豊校区運動会は、今では豊校区体育祭に名称が変わり、年ごとに増える参加者たちによって町別得点争いに熱が入っている。



豊校区体育祭「大玉おくり」

③ ウォークラリー

平成12年（2000）から豊橋総合動植物公園で開催しているウォークラリー大会は、日頃、校区・町内の日曜日行事に参加する体育委員が、家庭サービスの穴埋めとして採用した。

当初は、校区独自の企画ということもあり、90名弱であった参加者が、今では200名を越す規模となり、豊橋総合動植物公園を豊校区が借り切っている感じで、校区民から非常に喜ばれている。

④ キーンボールの導入

平成17年（2005）に新規採用されたキーン

ボールは、馴染みの少ない新スポーツであるが、体育委員が平成16年（2004）の講習会に参加して誰でもできるスポーツということで採用したものである。



キーンボール

— キーンボールとは —

直径約1.2mの柔らかい玉を使い、4人1組で構成されたチーム（おのおのピンク、グレー、ブラックに色分けされた3チーム）がコートサイズ内（15～21m×15～21m）でバレーボールのようにサーブやレシーブを繰り返す新しいスポーツ。

(2) 子ども会活動

豊校区子ども会は、西岩田・春日・三ノ輪（三町）の5単子（単位子ども会）で運営されている。

一年間の行事は、球技大会・ラジオ体操・盆踊り、さらにその踊りに欠かせない太鼓の練習・校区体育祭・豊橋まつり・クリスマス会・節分の豆まき会・お別れ遠足等である。

このような年間を通して活動をしている行事を陰になって支えているのが、子ども会役員である。役員たちは活動の主役は子どもであることを念頭に、子どもたちの自主性を育むことを願い、各行事ごとに子どもだけのプロジェクトチームを作らせ、子どもたちに企画・運営を考えさせている。

① 球技大会

毎年6月～8月、町別対抗で男子はソフトボール、女子はフットボールの試合を実施している。この球技大会は、優勝チームにはブロック大会出場という権利が与えられるので、各試合とも熱い戦いとなっている。

試合には、当然“勝ち・負け”が付き物であり、勝って喜びを最大限に表す子、負けて悔しさを涙で表現する子、怒る子など様々な人間模様がグラウンドに描かれる。

こうしたスポーツを通じて、ルールを守り、チームワークの大切さを会得することを子どもたちに知ってもらいたいと考えている。

② 盆踊りと太鼓

酷暑8月の夏休み期間中の行事。宿題を抱えながらも、太鼓や盆踊りの練習に生き生きとした子どもたちの姿が描かれる。

本番の日、5・6年生を中心とする曲に合わせた演奏は、やぐらの上で叩く太鼓の響きが夏の夕闇に溶け込み、豊校区一杯に届けとばかりに次第に暮れ行く夜空を揺さぶる。



太鼓の練習に励む子どもたち

③ クリスマス会

12月と言えばクリスマス会。この行事は各町単子別に開催している。

役員はお菓子よりもゲームを楽しむ雰囲気を盛り上げるために、子どもたちの興味を注ぐような趣向を考えている。



クリスマス会

④ 節分の豆まき会

寒い2月。子どもたちに昔からの行事を知ってもらおうと、節分の豆まきを行っている。昔からまくものは大豆といわれているが、当校区では大豆に代えていろいろなお菓子をまいている。

この行事は豊小学校の体育館を借用し、「鬼は外・福は内」と叫びながら壇上から一斉にまくというものであるが、まくというより拾う子らを目掛けて投げ付けるという勢いの豆まきである。



豆まき

⑤ お別れ遠足

寒さも和らぎ、桜の花もちらほらと咲き始める頃の3月になると、子ども会行事でも最大のイベントであるお別れ遠足の季節である。6年生も小学校を卒業するというので、彼らを送ることを目的としたバス旅行を実施している。

バス旅行の目的地の決定、車中でのゲーム遊びなどの企画は、子どもたちが段取りを定めて、役員の助言を得ながら遂行している。

どの年代の会でもそうであるが、このような行事は、目的地の決定に時間が掛かるものである。役員は、子どもたちが決定までに何か月も掛け、話し合いで決めていく過程を温かく見守っている。その結果、子どもたちにコミュニケーションの大切さが身につくと確信している。

このような活動が子どもたちの独立心、企画力、年上に対する敬愛、年下のものを愛する心を育むであろうと自負し、役員も陰ながら力を注いでいる。



子ども会お別れ遠足「名古屋港」

⑥ 子ども会の課題

豊校区の子ども会は、いくつかの行事を実施して、子どもたちを見守っている。しかし、今後の子ども会は少子化の影響をうけるのではないかと心配する。また、遊びの多様化で主役たる子どもの集合力が落ちているなどの課題が湧き上がっている。それでも、創造力と個性を豊かに伸ばす子ども会活動の力は大であるので、今後も子どもたちが創る子ども会の原則を守っていく必要がある。

そのために、子ども会の役員、育成者をはじめとして、子どもたちを育てる地域の力が必要となっていることを地域全員が心に刻み、子どもたちを温かく見守っていきたい。

(3) 更生保護女性会活動

① 新興住宅地の悩み

昭和54年(1979)に、土地区画整理事業により人口が急増して、マンモス化した岩田小学校から分離独立、豊小学校区が誕生した。

土地区画整理事業が始まるまでの当地域には、地域全体が「向こう三軒両隣り」的な雰囲気があり、他人の面倒な事柄を引き受けて対処するという面倒見の良い風習があった。

世間でも言われているように、当地も新興住宅地の近隣相互のコミュニケーションが希薄になり、特に成長盛りの子どもたちに地域としての目が行き届かなくなっている。



子どもたちとの交流 更生保護女性会

以前は、子どもたちの楽しみといえば、駄菓子屋での買い食い、くじ引きなどであったが、現在では、家庭でのテレビゲームや遊技場への出入りなど遊びも様変わりしてきた。子どもたちの中には、シンナーを吸ったり、暴走行為に走ったりする姿も見られるようになった。

このような反社会的な行為に対して活動しているのが、更生保護女性会である。

② 更生保護とは

更生保護とは、自由刑の執行を終わった人、免除を受けた人、刑の執行猶予の言渡しを受けた人たちに、必要な教養・訓練・医療・保養・就職を助け、環境の改善の継続的保護を行うことによって、本人が進んで法律を守る

善良な社会人になることを援助し、その速やかな更生の保護を業務としている。

そこで、更生保護女性会では、愛の呼び掛け運動を始め、遊び場・溜り場を見回り、声をかけ、子どもたちの気持ちを掴むよう話しかけ、反社会的行動に走る前に救おうと努力をしている。

③ 社会を明るくする運動

社会を明るくすることが、正常な社会生活から足を踏み外すことの防止と考え、保護司と更生保護女性会が校区民の協力を得て、広報活動やミニ集会を行い、自転車盗難防止やひったくり防止の呼び掛けをして、社会を少しでも明るくしようと尽力している。

その一環として手作りのお手玉、玉入れの紅白玉、部屋飾り用の折鶴および雑巾などを学校に贈って、少年たちの心の安らぎに協力をしている。

将来、地域を担う青少年たちを健全に育成するには、各家庭での力は当然であるが、地域全体が目的を一つにして温かく見守ることも必要である。豊校区が健全で明るく生活できる地域であることを、他地域に示すことができるよう今後も活動を続けていくことが豊校区住民の責務である。

更生保護女性会は、その一翼を担い、多岐にわたり活動を続けている。



豊校区健全育成会議

(4) 交通安全活動

① 安全意識の高い歩行者

豊校区は、国道一号線が南北に走り、交差点の多い校区であるが、大きな事故は比較的少なく、校区全体が落ち着いた地域である。

これは、校区内の主要な道路には歩道、自転車道が整備されていること、一般道も道路幅が広く見通しが良いからである。

また、児童らを中心に交通に対する自衛の意識を持っており、しかも他地域と比べて、それが高い感じがする。

これは通学団による児童らの登下校時のマナーからも推察できるが、学校や保護者の連携による十分な交通安全指導がなされている表れでもある。したがって、校区内における児童らを含む歩行者の安全意識は相当高いものと思われる。



歩道が整備された道路

② 運転マナーは今一步

反面、自転車や自動車のマナーはこれで良いのかと、首を傾げる場面が多くある。

豊校区の近隣には高等学校が多くあり、自転車通学の生徒が多く、朝夕の時間帯は自転車の交通量が非常に多くなる。そんな中でも、自転車の二人乗り、無灯火運転、道幅を塞ぐような二列以上の走行や交差点での飛び出しなどが散見され、あわやという場面に遭遇することもしばしばある。

自動車運転も、狭い道路での速度違反、交

差点や横断歩道での一旦停止義務違反、駐車禁止標識を無視した道路駐車などが目に付き、歩行者・運転者などがそれぞれの立場になった時の思いやりを持って走行し、運転者の責任である①交通規則を守る、②無理をしない、③迷惑を掛けない、④歩行者、自転車を守る、を実行されれば事故もなく、安全な地域として誇りのもてる豊校区が築かれることと思う。



元気に登校する小学生を見守る交通安全推進委員

③ 交通安全推進委員会の活動

そんな中での豊校区交通安全推進委員会は、毎月10日に児童の登校時での交通安全指導、交通安全を啓蒙するための看板作りや設置に努め、さらに校区の行事における安全確保及び駐輪場の整理といった活動により、地域貢献に一定の成果を果たしている。

今後は、豊校区の安全はもちろん、豊橋市全体に自転車走行者や自動車運転者に対する安全運転の呼びかけをすることを交通安全推進運動の重点課題とし、その成果を踏まえて、地域の安全を確保することが大切である。



子どもの安全を守るための講演会

(5) 防犯活動

① 5人の防犯委員

豊校区は、春日町（仲ノ町、伝馬町を含む）、西岩田（一丁目から六丁目）、三ノ輪本町（一丁目、伝馬町）、三ノ輪二区（二丁目から四丁目）、三ノ輪三区（五丁目、三ノ輪町三ノ輪）の5つの町で構成され、各町に一人ずつ、計5人の防犯委員が活動している。

近年の犯罪件数の増加、低年齢化傾向などの影響もあってか、防犯委員の任務も増加する傾向にある。防犯委員は経験が業務の糧となるが、現委員の経験年数は16年を筆頭に1年まで様々である。



防犯パトロール

② 活動内容

防犯業務は、毎年4月から翌年3月までの1年間を単位として活動している。通常は校区内9か所の公園の巡視を主な業務としている。これは毎月2回を目安として行っているもので、委員全員が職に就いているという時間的な制約のため、夜7時から8時半頃までの約1時間半を交替制で実施している。

ちなみに9か所の公園とは、西の山、北春日、春日、三ノ輪東、三ノ輪西、三ノ輪、田尻前、横手、切替の各公園である。

なお、三ノ輪西公園は平成17年6月に廃止されたが、代わりとして、町民参加による大きな公園（三ノ輪中央）の整備が決定されている。

③ 活動の目的

巡視の目的は、校区内の安全、治安の維持、及び公園内などに遺棄された危険物の見回りと撤去、さらに放置自転車の有無などをチェックすることにある。

業務の際の委員は、そろいの帽子、上着、ズボンを着用し、手には懐中電灯と信号灯を持ち、「パトロール中・豊校区防犯」と書かれた蛍光反射マグネットを両側に取り付けた自動車で巡視している。なお、校区内の行事が開催される時は、その都度、警備、見回り等の業務にあたっている。

ちなみに、8月には豊小学校のグラウンドで校区の盆踊り大会が開催されるため、午後3時から9時半頃まで会場の見回りをする。消防団の役割とも重複するが、お互いに協力し合って安全確保に努めている。

9月に入ると、校区の体育祭が豊小学校のグラウンドで開催される。8月の盆踊り大会と同様の巡視体制をとるが、自転車の利用者が多くなるので、会場の入り口付近に止められた自転車の整列維持にも力を注ぐことにもなる。

10月には、各町ごとに秋の祭礼がある。その手伝いも兼ねて、安全を願いつつ、子どもや青年たちのみこしが練り歩く道路の警備を中心に活動している。

(6) 消防活動

① 消防団の組織

豊校区の歴史は浅く、比較的新しい校区の防災を預かっているのが、豊橋市消防団第二方面隊豊分団である。

結成当初は器具庫もなく、東分署を借用していたが、豊分団の結成後2年目に造られた器具庫を使用するようになり、現在は平成14年（2002）12月に耐震の第2器具庫に建替えられている。豊分団の団員は、総勢17名であ

る。団員は、勤め人、自営業など仕事が多様多様で、全員が揃うというのはなかなか難しいが、仕事分野が異なることが幸いして、それぞれの得意分野を発揮して何事もやり遂げる能力を持っている。

② 分団の活動

非常時の消防活動が多くては校区内の安心感が薄まるので、ないに越したことはない。

歴史の浅い校区ではあるが、一年間の活動状況を紹介する。



豊分団結団式

4月

- 新入団員を迎える。新入団員を中心にした基礎訓練に始まり、結隊式及び結団式を実施する。
- 早朝5時から7時まで、操法訓練を実施する。この訓練は、5月に実施される操法大会に向けた訓練であるとともに、いざという時に備えた訓練も兼ねている。

5月

- 操法大会が実施される。大会では、消防自動車に積んである原動機付小型ポンプで水を出す早さ、操作の正確性、手際良さ、操員の息の合い具合などが審査対象とされる。豊分団は、昭和56、57、59年に第2方面隊消防操法大会で優勝した実績がある。



操法大会

- この大会参加のほかには、日常活動で各町内に設置されている全部の街頭消火器や消火栓のチェックをして、いざと言う時に備えている。

6月

- 水防訓練に参加。水害に備えて豊川で「土のう積」を実施する訓練である。

7月

- 消防団の活動に理解し、サポートしてくれる家族への感謝のしるしとして、海水浴やバーベキューなど、家族共々の懇親を図っている。

8月

- 校区盆踊り大会の会場で防犯委員と協力して警備等に当たっている。

9月

- 9月1日は昔から二百十日と言われ、比較的災害の多い月として『防災の日』が設定されている。このことから、市中の消防署、消防団などが集合して災害に備えた訓練を行う。また、校区の体育祭の警備にも当たっている。

10月

- 各町の祭礼があり、特に花火など火を使う

行事が増えるので心を引き締めて参加している。

11月

○11月9日は消防記念日であり、この日から始まる秋の火災予防運動や防災の日の広報活動に力を入れている。

○この予防週間では、午後9時に消防署のサイレンと同時に半鐘を鳴らすことになっている。

○以前は、三ノ輪地区の白山神社にあった火の見櫓の半鐘を鳴らしていたそうであるが、時代の流れか、その火の見櫓はなくなり、今は春日町公民館にある半鐘を鳴らしている。



春日公民館の半鐘

○なお、11月9日だけが防災の日ではなく、毎月19日を、「防火の日」と設定して活動している。

12月

○年末には、年末特別警戒夜警のため夜7時から翌日2時までの間を器具庫に詰めて、予防また有事の発生に備えた活動を行っている。

1月

○出初め式があり、正月を迎える新たな気持ちもあって、厳しくつらい務めも新鮮な心で過ごすことができる。

3月

○観閲式と春の火災予防週間の活動をして一年の務めが終了する。

③ これからの課題

豊分団は地域住民に愛され、頼られる分団でありたいと願い、一致団結して豊校区を守っていくことをモットーとしている。しかし、今後の分団の活動を考えていくと、いくつかの課題が浮かび上がってくる。

その一つは、少子化の影響から団員の確保が困難になるという傾向は否めない。そのため、団員不足の心配は、火災発生時に団員の活動に支障をきたす心配がある。

二つ目の課題として、校区民の防災に対する一層の意識改革が求められる。例えば、火事をださないという自覚を高め、日ごろから消火器の使い方をマスターして、万が一火事を起こした時には、初期消火に備える。また、東南海地震が想定される昨今、自分の生命は自分で守るという意識のもと、防災グッズの準備や非常時の家族の安否連絡の確保など、家族間で確認し合っておくべきだ。

三点目として、校区民一人ひとりが近隣の方々との交流をより一層深めておくこと。昨今、近所付き合いも疎遠になってきたといわれている。本校区では冬の寒い中、現場で活動している時、近隣の人から「寒い中ご苦労様」と一言が掛けられる温かい雰囲気を持った校区である。こうした些細な行為を積み重ねていくことが、いったん事が起こった場合、町内の方々が互いに協力、援助し合うことができるかと確信する。



消火器の使い方を訓練する住民

(7) 清掃活動

① 530運動発祥の豊橋

豊橋から発祥した530運動は、全国に広まり定着している。

豊校区は、530運動が盛んとなった昭和50年（1975）から4年後の54年（1979）にマンモス化した岩田校区から分割された校区であり、その活躍も新たな心を持って独自の力を発揮している。校区を形成する5町から各1名の清掃指導員の委嘱状を受けた指導員を配置している。

② 清掃指導員の活動

清掃指導員は月に一度集まり、情報交換や研究をし、ゴミステーションを巡回し、不法投棄に目を光らせたり、情報の収集に努めている。また、町内の清掃指導やゴミ7分別（ゴミの分け方）の指導をし、清掃活動を通して校区内の美化に力を注いでいる。

③ 3分別から7分別へ

3分別から始まったゴミの分け方は、平成15年（2003）7月から7分別になった。この7分別の中には、びん・カンなどの資源ゴミがあるが、従前の5分別のときから「びん・カンボックス」が各町内に数多く設置されるようになった。こうした動きの中で、住民にも530運動が定着してきたが、これまで次の



530運動

ような活動があった。

全体行事として8月の盆踊り大会、9月の校区体育祭、また、10月には三ノ輪3町の平成まつりが行われるが、これらの行事の際には、必ず、指導員の指示で事前に分別のゴミ箱を作り、その箱に「燃やすゴミ」、「プラスチックのゴミ」、「ペットボトル」、「びん・カン」などの表示をしてゴミ分別の啓発に努めている。

こうした行事の最中に、幼な子が母親に手を引かれて「このゴミはこの箱にポイして」と教えられながら捨てる姿は、将来のきれいなまちづくりにつながる光景である。



ゴミ分別を推進する清掃指導員

④ 研修と指導

指導員は、ゴミ処理場や埋立処理場の施設見学などの研修を行う一方、家庭菜園家が集ったときには、リサイクルとして肥料作りなどの意見を交換し合うなど、いかにゴミを少なくするかを話し合う機会も設けている。

校区内の三ノ輪三区では、毎年7月に三区公民館の大掃除を町を挙げて実施しているが、このような活動や、町内施設・道路・住宅周辺の清掃などを通して、530精神がお互いに養われ、将来の豊橋市の美化につながるのである。自然環境破壊はゴミ一つを捨てることから始まっている。

豊校区スポットライト 5

豊橋筆の沿革

筆が日本に伝来したのは6世紀と推定される。当初はウサギやタヌキの毛で作られる穂先の短いものだったが、弘法大師（空海）が唐より帰国してから長い筆が作られるようになったという。文化の中心だった奈良から各地に筆作りが広がった。

江戸時代、下級武士の手内職として細々ながら毛筆（しんまきふで 芯巻筆）を製造していたようだ。豊橋ではイタチやタヌキが多く生息し、原毛が手に入りやすかった。

毛筆の将来性に着眼した者が、芳賀次郎吉である。次郎吉は渥美郡高足村神官芳賀庄左衛門の息子であり、当時、吉田藩鉄砲組の士で、手内職として、毛筆製造をしていたが、東京に出て修業した。苦心研鑽の末、今までの芯巻筆から東京で修得した水筆技法を持ち帰り、毛筆製造に着手した。これが豊橋毛筆製造の始まりである。

この芳賀次郎吉に弟子入りした者に旧藩士の川村喜佐太、永坂弥作、佐野重作等がいたが、重作以外は弟子をとらずに終わってしまった。したがって、豊橋毛筆界に新風を吹きこんで、興隆の基礎を築いたのは佐野重作その人である。

重作は嘉永5年（1852）9月24日、渥美郡豊岡村飯村（現在の豊橋市飯村町）の百姓清九郎の二男に生まれ、明治7年（1874）、毛筆製造業を専業としていた芳賀次郎吉に弟子入りし、14年間、次郎吉の元で修業することとなった。

芳賀次郎吉の元で修業を終えた重作は神明町で独立開業した。重作は従来の製法に独自の工夫を加えて改良した毛筆を製造して売り出すと、これが好評を博した。また、当時、

関屋町百花園にいた画家渡辺小華にも愛用され、ますます声価が高まった。

こうして需要が伸び、一人では手不足となったので、初めて弟子をとることになった。この時、弟子入りしたのが、実弟の佐野権作、三井鉄太郎、米津市太郎等、のちに毛筆製造業界の長老となった人たちである。しかし、弟子が増えると、たちまち生産過剰となり、その販路に苦慮するようになった。ところが、たまたま奈良の墨屋が上京の途中、豊橋に立ち寄り、過剰になった筆を東京方面へ売り出してはと助言を与えた。豊橋筆は「水を用いて練りませ」をするので、墨になじみやすく、書き味がすべるようだと、書家たちの絶賛を集めた。

重作は明治44年（1911）8月28日、59歳で没したが、重作の豊橋毛筆業に尽くした功績をたたえ、昭和34年（1959）龍拈寺長養院境内に記念碑が建てられた。

豊橋筆は、脈々と伝統を受け継ぎ、昭和51年（1976）12月15日には歴史と品質が高く評価され、通商産業省（現在の経済産業省）より「伝統的工芸品」の指定を受けた。

— 筆作りの手順 —



第3章 教育と文化

1 豊小学校

(1) 昭和54年(1979)4月開校

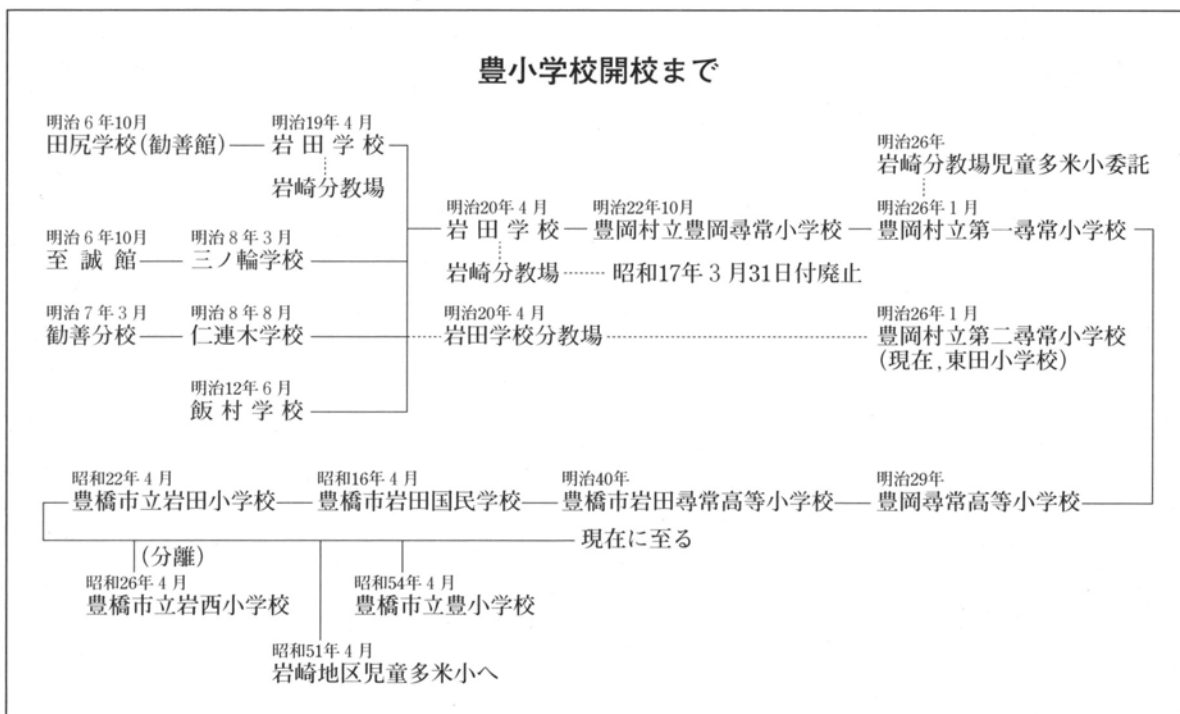
豊小学校は、昭和54年(1979)4月1日に岩田小学校から分離して開校した。豊橋市では45番目の小学校である。そこで、豊小学校の母体である岩田小学校のあゆみをたどってみる。

① スタートは田尻学校

学制は明治5年(1872)8月3日付をもって公布された。事実上の学制実施は翌年にはいってからであった。豊橋地方においては、明治6年(1873)10月末までに16の学校(現豊橋市)が設立された。

岩田小学校の前身である田尻学校もこの時期に設立された。正確な呼称としては、第十中学区第七番小学田尻学校であり、別名勸善館ともいわれた。明治6年(1873)10月29日が創立日である。所在地は、渥美郡田尻村で祥雲寺客殿を学校として開校した。

その後、学校も増加し、明治19年(1886)には岩田学校となり、田尻、平川、上・下岩崎、手洗が合村され岩田村の経営する学校となった。以後、明治22年(1889)には、岩田、岩崎、東田、飯村の六か村合併により豊岡村立豊岡尋常小学校に統一された。さらに下図のように、明治26年(1893)豊岡村立第一小学校、明治29年(1896)豊岡尋常高等小学校と幾度か校名改称を経てきた。



「郷土資料いわた」より

② 戦後になって岩田小学校

戦後の昭和22年（1947）に「豊橋市立岩田小学校」が設立された。児童数も下記の表でみるように徐々に増加し、昭和26年（1951）には「岩西小学校」が分離した。

しかし、その後も児童数は増加の一途をたどったが、特に増加が目立つのは、昭和45・6年（1970～1971）頃からである。

昭和44年（1969）頃から、西岩田、中岩田や東岩田地区さらに平川地区で土地区画整理事業が開始された。農地が宅地に改変され、原野、山林も住宅地へと変様していった。

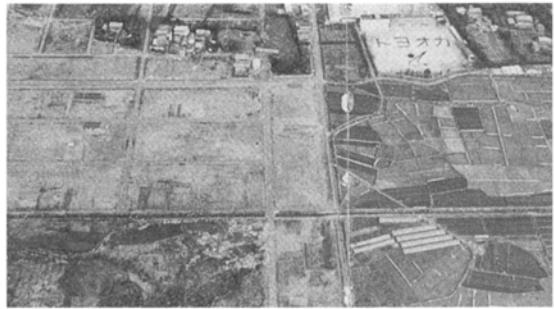
岩田小学校の児童数は、昭和50年代（1975）には1年ごとに急増し、42学級、1,800名を超える市内最大のマンモス校となった。

その結果、昭和54年（1979）、岩田小学校の3分の1の児童が移り、「豊小学校」が新設されるにいたったのである。

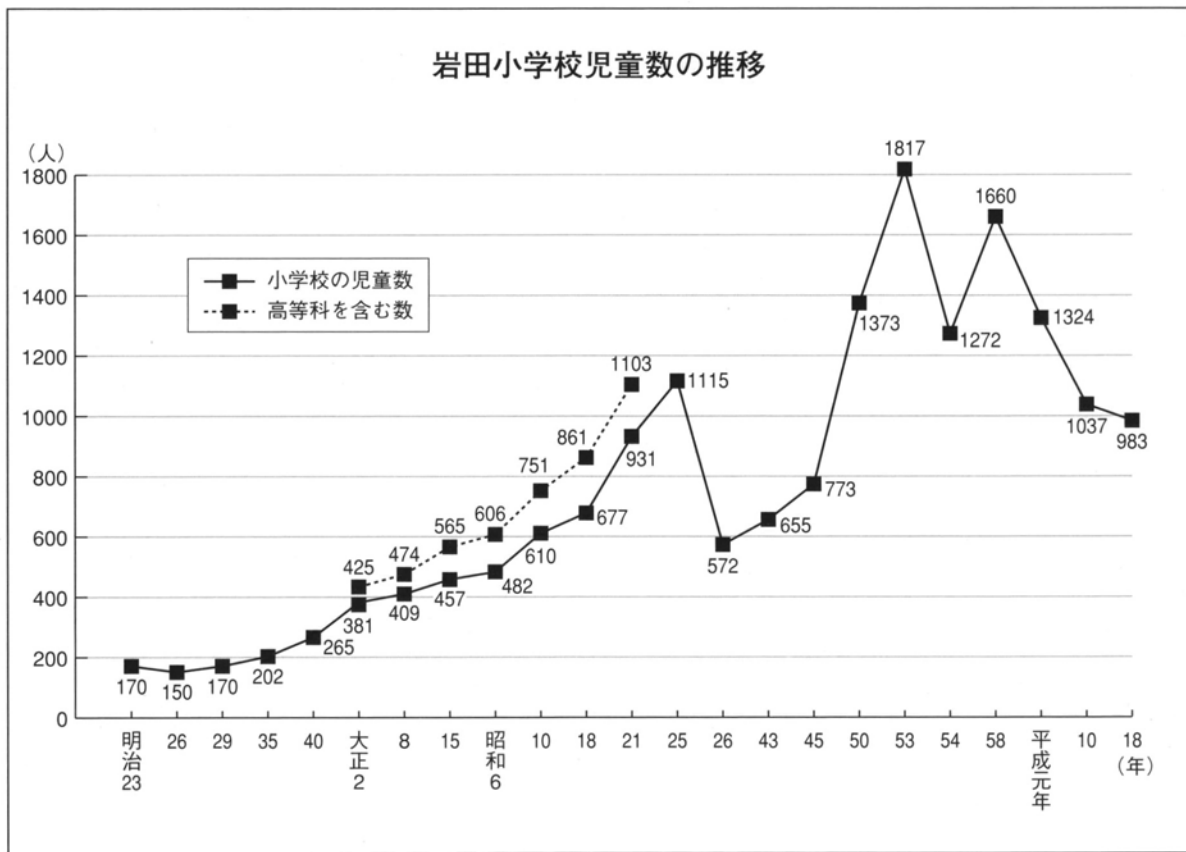
(2) 豊小学校開校まで

① 学校用地の確保

現在、学校のある所は、全部田んぼで体育館のあたりには小川が流れていた。田と田の間には、あぜ道が長くのびていた。学校への行き帰りの道も台風や大雨の時は川のようになり、フナやドジョウ、シジミなどにとって道草をしながら歩いたことが、楽しい思い出の1つとなっている人も少なくない。時々イタチも出る自然に恵まれた土地であった。



豊小学校建設前の敷地



「郷土資料いわた」より

このような土地に、岩田第一土地区画整理組合が、将来の住宅建設による人口増加に備えて、新しい学校をつくるための土地を確保したのが昭和43年（1968）のことである。その10年後、昭和53年（1978）7月10日に学校建設のための起工式が行われた。



開校時の豊小学校

② 校名、校章の決定

昭和53年（1978）、校名を校区民から募集し、356点もの応募があった。その結果、「西岩田」「豊」「東豊」「東部」の4つが最後まで残り、最終的に12月14日に「豊」と決定された。

これは旧豊岡村の豊をとったもので、豊には、物事が盛んで満ちたりさまという意味

がある。12月21日には校章が決められた。豊小学校の児童がやさしく生まれ、健やかな成長を願ってデザインされたものである。



豊小学校校章

(3) 「開拓魂」を合い言葉に

① 4つの校訓

昭和54年（1979）4月3日、市内で45番目の小学校が誕生した。当時、校区は、8割が

他からの転入者であったため、郷土愛や校区意識のないところからの出発には、「自分の力で切り開く」開拓魂が必要であると考え、校訓を「開拓魂」とした。

そこには次の4つの願いが込められている。

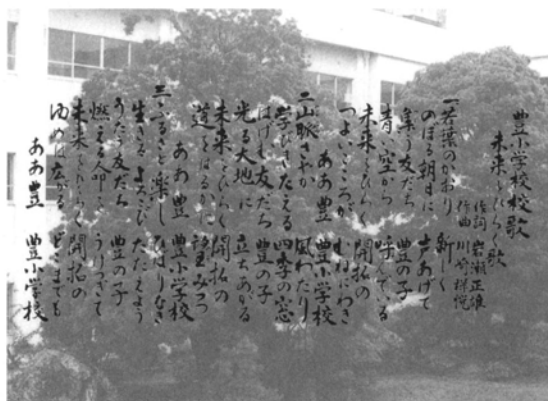
- ・荒けずりでもよい
- ・手を汚すこと
- ・力をおしまないこと
- ・創意を凝らすこと



開校2年目学校環境緑化コンクール県表彰

② 校歌「未来をひらく歌」ができた

開校から2年目の昭和56年（1981）3月1日、待ちに待った校歌ができた。それまでは、開校当時の6年生が作詩、石田勉先生が作曲した「豊音頭」や「今月の歌」を歌っていた。いろいろな式の時、校歌がないさみしさを誰もが感じていた。



校歌「未来をひらく歌」



校歌発表会

③ 緑いっぱい为学校「豊」

豊小学校の校舎は、粘土質の赤土の埋め立て地に建設された。当時の校庭に緑はゼロ。新設校とはいえ、誠に殺風景だった。

「アメリカでは開拓の当時、緑の苗木を持って大陸奥地へ旅したといひます。緑が育てば、人もそこに生きていけるからです。緑は人の心に生活への希望を抱かせるために、欠かすことのできないものです。」

緑の育つ所に人は育つ。

初代山口孝雄校長のこの考えを受け継いで、開校当時から児童・教職員をはじめ、PTA会員、校区民の尊い汗の結晶が、現在の緑豊かな豊小学校の礎となった。



校区民・PTA・児童による勤労奉仕

中庭でひとときわ目をひくものに「開校記念庭石」と「ヤマモモの木」がある。

「開校記念庭石」は、豊小学校の建設協力員の方々が、開校までこぎつけた喜びと関係当局の方々、校区民への感謝の気持ちを形に残しておきたいと考えられたものである。

もう一つには豊小の子どもたちに、いつまでも「開拓魂」を持ち続けてほしいという願いから、学校に寄贈されたものである。他にも大小合わせると15個ほどの岩が校内に設置されている。



豊小学校のシンボル「開拓魂」

「ヤマモモの木」は、豊小学校のシンボルとなるような大木探しの結果、田原町六連に植えられていたものが選ばれた。2本とも、樹齢80年、樹高10メートル余り、幹周り2メートル前後もある大木であった。

(4) 特色ある活動

① 緑化運動

学校の緑は、子どもたちの手でも進められた。開校した当時の、埋め立ての荒地に、一人一本、ホルトやサツキの木を植え、植えた木には自分の名札をつけた。自分で水をやり、草をとり、肥料をやって育てる活動をした。

6年生が自らの手で育ててきたホルトも卒業とともに手をはなれる。そこで、卒業直前に「ホルトを頼みますよ」と1年生に手紙を書き、世話を1年生に託す。1年生は、自分

のホルトを得た喜びを忘れず、ホルトの世話を
 する活動が継承された。



1年生にたくす6年生

また、五年間の計画で一万本さし木運動や
 一人一鉢運動も展開された。

開校から4年目には、緑化運動も順調に進
 み、樹木も増加し、大きく育ち、常時活動も
 目の届かないところが出てきた。このことが
 児童会で議題となり、グリーンパトロール隊
 が生まれた。パトロール隊は、4年生以上の
 希望者で編成され、水やり、害虫取り、肥料
 やりなどの樹木の世話をはじめ一鉢栽培、学
 校周辺の美化運動、広報紙の発行などを行っ
 た。緑のベレー帽をかぶってのパトロール隊
 であった。PTAの協力、総代会・校区民の
 援助、そして、こうした子どもたちの努力の
 賜物で昭和59年（1984）「美しい環境づくり
 推進モデル校」として県より指定された。

② はだしの活動

「はだしで一日を暮らそう」を合い言葉に
 はだしの活動が、昭和59年（1984）から始ま
 った。人間の生活が快適で便利になっていく
 一方で、子どもたちは、だんだん自然から遠
 ざかり、土を踏台にして遊ばなくなった。物
 の豊かさの中で何不自由なく過ごし、耐える
 力を欠きがちな現代っ子たちに、たくましく
 立ち向かう力をつけてやりたい。

はだしの活動は、その一つの試みとして実
 践された。現在ではこの活動は行われていな
 いが、運動会で5・6年の「組み立て体操」
 にその名残がある。

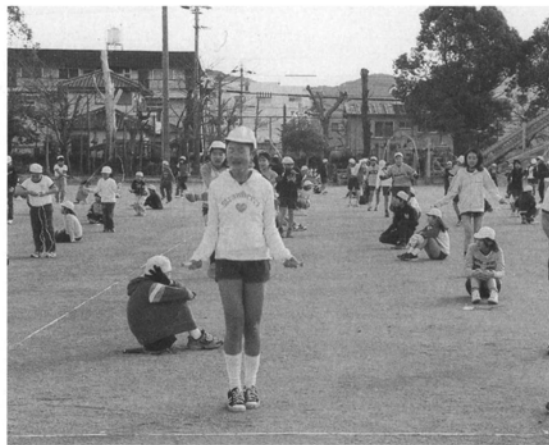


5・6年生による組み立て体操

③ おはよう運動

「おはよう運動」は昭和60年（1985）から
 始まった。子どもの一日の生活を活気に満ち
 たすばらしいものにするには、朝のスタート
 が最も大切という考えからだ。

始業前の時間を活用して毎週火曜日から金
 曜日の4日間行われた。内容は持久走、エア
 ロビック、縄跳び、行進など月ごとに種目は
 決められていた。現在もこの「おはよう運
 動」は実施しているが、運動会前の練習やマ



おはよう運動の一環なわとび

ラソン大会に向けての駆け足、縄跳び大会に向けての練習も期間を決めて行っている。

④ やまもも班（縦割り班）活動

最近、異なる学年の子と一緒に遊ぶ機会が少なくなった。そこで、1年から6年までの縦割りでのグループ（やまもも班）をつくり、1年間さまざまな活動をしている。高学年は、その活動を企画運営することでリーダーとしての自覚をもつことを、低学年はその姿から学ぶことをねらっている。

4月当初に「1年生を迎える会」で、やまもも班のメンバーの顔合わせからスタートする。そして、週に1度、班ごとに話し合った計画でさまざまな楽しい活動が行われている。

やまもも班での大きな行事としては「豊オリンピック」「やまももランチタイム」「豊集会」がある。

「やまももランチタイム」は、学校内や周辺の公園（田尻前・切替・西の山・横手・春日公園等）へやまもも班で出かけ、木陰や青空のもとで弁当を食べたり、遊んだりする。この活動は、異なる学年と交流が深まるとともに、事前の計画作りで、児童の自主性を育てるねらいがある。これも、平成9年（1997）に始まり現在でも続けられている。



やまももランチ

⑤ 豊オリンピック

「豊オリンピック」は、児童会（計画委員会）が、企画・運営する行事で、個人種目とやまもも班対抗種目で競い合う。個人種目は、りんごの皮むき、靴飛ばし、缶つみ、豆つかみなど多種多様であり、独創的で楽しい行事である。入賞者には、高学年手作りの金銀銅メダルが渡される。やまもも班対抗もボール送りや長縄とびなど計画委員が企画した種目を授業前の活動の時間をつかって、練習をして本番を迎える。この活動は、平成6年（1994）から始まった。

「豊集会」は、卒業する6年生と在校生最後の集会で、6年生から5年生へのパトタッチセレモニーと卒業生を送る会の2つの会からなる。



1年生を迎える会



豊オリンピック



豊集会

⑥ 総合学習

平成14年度（2002）から完全学校週5日制が実施された。それとともに、新しい学習指導要領がスタートした。新しい学習指導要領は、学校週5日制の下、ゆとりの中で一人ひとりの子どもたちに「生きる力」を育成することを基本的なねらいとして改訂された。

改訂されたねらいの中で、「生きる力」を育成するために、各学校が創意工夫を生かして、今までの教科の枠を越えた学習ができる「総合的な学習の時間」が新設された。

この総合学習はこれまでのとかく画一的だった授業を変えるねらいがあり、

1. 地域や学校、子どもの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間
2. 国際理解、情報、環境、福祉、健康など従来の教科をまたがるような課題に関する勉強が行える時間

として、新しく設けられた。

学年	総合的な学習例
3	勤労体験「野菜を育てよう」 生命・環境「生き物調査隊」 地域に学ぶ「昔の生活・昔のあそび」
4	勤労体験「大きく育てサツマイモ」 地域「校区の今と昔（開拓魂って?）」 地域「校区ヒヤリ地図」
5	勤労体験「米・野菜作りに挑戦」 「収穫後の米のワラを使って」 環境「無農薬野菜と身の周りの環境」
6	福祉体験「アイマスク・車いす体験」 「福祉施設訪問」 国際理解「レッツ・ゴ・愛・地球博」



3年生 野菜を育てよう



4年生 大きく育てサツマイモ



5年生 ワラを使って



6年生 アイマスク体験

(5) これからの学校教育

① 英語活動

平成12年度(2000)から本格的に英語活動が取り入れられた。

目的は、コミュニケーション能力を高めること。国際社会の中で生き生きと活躍するための自己表現能力と、広く世界中の人々とコミュニケーションを図るための道具として「言葉」に着目した。語学力でなく、意志を伝える表現力を伝えることが第一目標。

そこで、単語や文法にはこだわらず、歌やゲームによって英語の語感、リズムに親しめることをねらった活動が行われた。これらの活動を生かした国際理解をねらって「国際交流会」や学習発表会で「英語劇」を発表した学年もある。

平成19年度(2007)からは、どこの小学校でも「英語教育」が取り入れられることになっている。本校では、これまでの実践を生かしてより一層の充実をめざしていきたい。

② 2学期制

長年なじんでいた3学期制が廃止され、豊橋市内の小学校は平成18年度(2006)から選択的に、中学校は平成19年度(2007)から2学期制を導入することになった。

戦後の義務教育がすべての権限をもつ国・文部省(現在は文部科学省)の指導・監督の下で進められ、その結果、全国民に一定水準の教育を施すことができた。しかし、不登校・非行の低年齢化・学力低下など様々な課題が浮かび上り、それに加えて、今日の国の財政難に端を発した規制緩和の流れの中、各地から教育の見直し論議が興り、教育権限の地方委譲が高まってきた。

豊橋市も、学校が自主・自立し、うちの学校だからこそできるという気構えのもと、校長を中心として、学校ごとに独自のビジョンを作り、学校運営を推進することをねらいとして、2学期制を導入した。

豊小学校は、平成19年度(2007)から施行していく。

学校・地域・家庭

東日新聞 2006年(平成18年) 3月11日(土) ⑧



安全・安心の応援団

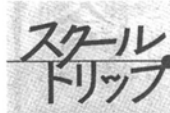
安全・安心の応援団

DATA

- ◆ 校長 鈴木康夫
- ◆ 児童数
 - 1年91人(47人)
 - 2年70人(42人)
 - 3年92人(61人)
 - 4年83人(66人)

「ヒヤリ地図」で交通安全意識向上

校舎は枯葉赤土の埋め立て地に建設され、当時の校庭は緑はゼロ。緑が育てば、人もそこに生きていけるからです。緑は人の心に生活への希望を抱かせるために、欠の事故や歩行者、自転車かすことのないものの飛び出しによる事故が



豊橋市・豊小学校

代金が、交通安全金協賛豊橋支部から「交通ヒヤリ地図」の作製依頼を受けました。これは、校区内の危険な場所(ヒヤリとする場所)を地図に示し、交通安全意識を高めることを狙いとしています。この地図は、大人のだけでなく、本校の4年生が家族と話し合い、

緑、笑顔や歓声あふれる環境

校舎は枯葉赤土の埋め立て地に建設され、当時の校庭は緑はゼロ。緑が育てば、人もそこに生きていけるからです。緑は人の心に生活への希望を抱かせるために、欠の事故や歩行者、自転車かすことのないものの飛び出しによる事故が



「豊集会」PTA有志から合奏の贈り物

豊小学校区 交通ヒヤリ地図



子ども110番の家

(標記のない家の場合はお住まいの自治体にお問い合わせください。)

今年産	園庭併設
今年産	小川丹商店
今年産	東豊商店
今年産	東宮宅
今年産	島本宅
今年産	南ビックナズ
今年産	アキラム商店
今年産	三塚米店
今年産	東豊金具車具部
今年産	山内コンクリート工業所
今年産	タカノデンソー
今年産	アノエ化粧品
今年産	毎日オート
今年産	新栄住宅
今年産	新栄ハン屋
今年産	東豊宅
今年産	あなみ不動産
今年産	豊田タカラリンク

地図記号の見方

- : 代表的なヒヤリ地点
- ⊙ : 飛び出し注意 (一時停止無視)
- ⚡ : スピードを出し車が多い
- 🚗 : 駐車車両が多く通行を妨げられる
- 🏠 : 子ども110番の家
- 🏪 : コンビニエンスストア等
- 🏛️ : 公民館、集会所等
- ⚠️ : 不審者・ちかん情報あり、注意

【詳細説明の凡例】

- 👤 : 歩行者
- 🚲 : 自転車
- 🚗 : 車
- 🛑 : 一時停止標識
- 📡 : 信号機

【校区のみなさまへ】
 この地図はヒヤリ・ハット箇所について自ら考え、さらに、家族や町内等で話し合い、身近な交通危険箇所を把握しているなどということもです。
 ・常日頃から交通に対する危険を意識していただくことで、交通事故を回避する能力の向上が期待できます。
 ・特に、小さなお子さんの車やバイク、自転車に怖い目をしたという声を聞いてあげてください。
 ・また、不審者・ちかん情報にも注意してください。

自宅のまわりで、車などに気をつけたい所(ヒヤリ・ハット箇所)はどこですか？

やり方

みんなでやってみよう。

- 自宅に○印をつけよう。
- 通学・通勤などよく使う道に色を塗ってみよう。
- よく行くところに△印をつけてみて。
- ヒヤリとした場所に×印をつけよう。

1 【西岩田五丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車にヒヤリ

一時停止しない

2 【西岩田五丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車にヒヤリ

一時停止しない

3 【西岩田一丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車・自転車にヒヤリ

一時停止しない

4 【西岩田一丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車にヒヤリ

一時停止しない

知ってる？自転車のルール。自転車は車の仲間なんです。

ポイント1
「二人乗りはいけません。」
【道路交通法57条】
2万円以下の罰金又は料料

ポイント2
「止まれる」標識では一時停止しなくてはなりません。
【道路交通法43条】
3万円以下の罰金又は5万円以下の罰金

ポイント3
「片手、手放し、傘さし運転はいけません。」
【道路交通法71条】
5万円以下の罰金又は料料

ポイント4
「夜はライトをつけなくてはなりません。」
【道路交通法52条】
5万円以下の罰金

ポイント5
「自転車は2台・3台と肩に並んで走ってはダメです。他の通行の妨害をしてはいけません。」
【道路交通法19条】
2万円以下の罰金又は料料

ポイント6
「自転車は人を死傷させると…」
【刑法第217条】
5年以下の懲役又は50万円以下の罰金

7 【三ノ輪町二丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車にヒヤリ

一時停止しない

8 【三ノ輪町五丁目】
信号の変わり目に①から信号無視をする自動車にヒヤリ

一時停止しない

9 【三ノ輪町二丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車にヒヤリ

一時停止しない

10 【西岩田三丁目】
①から飛び出す一時停止無視の自動車にヒヤリ

一時停止しない

4年生が作成した豊校区ヒヤリマップ

豊校区スポットライト 6

田尻原を切り拓いた人たち

長い戦の世が終わった。三河の深溝から移ってきた吉田の殿様は、家康に仕え生きてきた日々を思い返していた。

「吉田に来て15年、戦続きの日々であったが、これからは世の中が変わる。この吉田を豊にするために、自分の得意な土木の技を活かし、領地内の原野の開拓に取り組もう」

殿様は家老に、吉田の南東に広がる田尻原の開拓を奨めた。家老は見わたす限りの原野が広がる田尻原を眺め、藩のため、領民のためにこの原野の開拓に取り組むことこそ我が使命と、早速、悟真寺の善立和尚と、羽田、仁連木、両村の屈強な農民7人に田尻原を切り拓くように命じた。

善立和尚は、まず田尻原に源立寺を建立した。7人の農民は、寺の周りに家をたて、仏さまを心のよりどころに、力をあわせて荒れはてた原野の開拓に取り組んだ。

来る日も来る日も、朝早くから夜遅くまで斧、鋤、備中を振りかざし、血反吐を吐くほど働いた。田尻を切り拓く作業は過酷であったが、8人は、この地に骨を埋める覚悟であった。しかし、8人の労力では一向に開拓は進まなかった。

そこで、開拓者の増員を何度も藩に申し入れた。8人が田尻村に来て10年目に、やっと開拓の見通しが立つようになった頃、農民10人が田尻村にやって来た。10人は禅宗の者が多かったので、新たに祥雲寺が建立された。こうして田尻村の開拓は大きく進み、広がっていった。その田尻村の付近には、まだ広大な原野があった。

田尻村が拓かれて40年が過ぎた頃、平川の原野を切り拓こうとする者たちが現れた。篠

田村の弥兵衛と吉田榎河岸の利兵衛の二人が、一緒に働く者をつのり、新しい原野を切り拓こうとした。

二人は、開拓を願い出たが、ここには水もなく、溜池を掘ることを思いつき、開拓者たちと苦闘の末に岩崎村と田尻村の間に二つの溜池を掘った。一つは利兵衛池、もう一つを水神池とした。池ができ、平川は新田村として大きなものになった。しかし、苦しい生活が続き、14軒の開拓民家族も11軒に減ってしまった。

明治維新直後には、藩士たちが「武士の世は終わった。今後は、自分たちで新しい生き方を見つけなくてはならない。仁連木村分地の三ノ輪の開拓者をつのっている」と、80余名余りの藩士が三ノ輪に入り、田畑を切り拓いて家々を建てた。

こうして三ノ輪村ができあがった。しかし、ここの人々の生活も苦しく、男たちは、農作業の合間に柵をのせた車をひいて稼ぎ、女は蚕を飼って機織りをしたり、日雇いに出たりした。人々は、国を豊にするために、家族を守るために荒れた原野を切り拓いた。並々ならぬ苦勞をした人々の開拓魂は、いつまでもこの大地に根付いている。

豊橋民話集「片身のスズキ」より



学芸会「ゆたかの昔と今」

2 豊岡中学校

(1) 昭和25年(1950)4月開校

豊小学校を卒業した児童たちの進む先は豊岡中学校である。豊岡中学校は、昭和25年(1950)4月1日、青陵中学校より分離してスタートした。

この豊岡中学校のあゆみを紹介する。

① 校地は八幡神社境内

終戦後、六三制の義務教育が発足した。そして、当時の岩田、岩西、多米、東田地区の子どもたちの中学校として「東部中学校」が設置された。しかし、終戦直後の混乱の中、財政難で校舎建築の予算もないため、本部は現在の豊橋商業高校におかれ、豊橋東高校と岩田小学校を借りて分散教育でスタートした。

その後、東部中学校は、北部第2中学校と合併し、青陵中学校が開校した。

当時、岩田地区の子弟は青陵中学校に通学していたが、遠距離の青陵中学校へ通学する生徒たちの苦勞する姿を目にして、保護者から校区内に中学校誘致の強い要望が起こった。

そこで、歴史のある八幡神社の境内に新しい中学校が誘致されることになった。



開校当時の玄関前(北校舎)

② 勤勞奉仕による運動場整地

こうして、豊岡中学校は、昭和25年(1950)、青陵中学校より分離してスタートした。

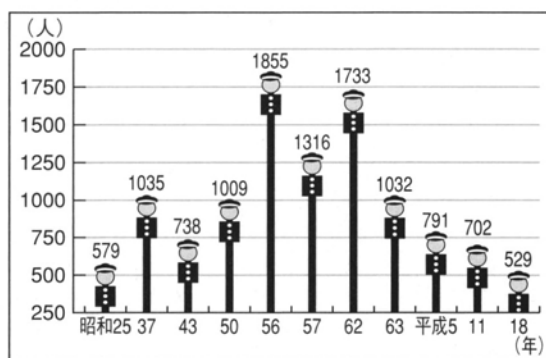
当時は、豊橋市も財政難で、地元も相当な負担が背負わされた。特に、運動場は神社の境内だったので、排水も悪く、大木の伐採や整地作業のため、校区の人たちや職員・生徒たちの勤勞奉仕に頼るほかはなかった。

③ 農業地帯から住宅地に

豊岡中学校校区は、江戸時代の新田開発によって開けてきた校区であるが、昭和30年代に入っても、中学校周辺はのどかな田園風景が広がっていた。

この地区が、計画的な町づくりとして発展していったのは、岩田第一土地区画整理事業が始まった昭和43年(1968)以降である。

昭和45年(1970)から岩田第二土地区画整理事業が始まり、昭和48年(1973)からは平川本町土地区画整理事業も始まり、稲作と園芸を中心としていた農業地帯から住宅地域として生まれ変わった。



豊岡中学校生徒数推移

④ 2つの中学校に分離

その結果、急激な人口増加を引き起こし、中学校の生徒数も大幅に増加した。昭和56年(1981)には1,850余名のマンモス校となり、昭和57年(1982)、東部中学校として分離独立した。しかし、その後も、生徒数の増加は引き続き、昭和63年(1988)には、さらに東陽中学校に分離独立した。

3つの土地区画整理事業の終了後、わずか

な期間に2つの中学校が新設されるという大きな変化が起きた地区である。

⑤ 豊校区は豊岡中学校へ

1千人以上の生徒が在籍した豊岡中学校も東陽中学校と分かれて、中規模校となり、生徒数の増減も落ち着いてきた。

平成18年5月現在、学級数14、特殊学級2、生徒数529名である。

(2) 校名の由来

豊岡中学校周辺は、明治39年（1906）、豊橋町と合併前は、渥美郡豊岡村と呼ばれていた。豊岡村は、明治22年（1889）、当時の飯村、岩田、岩崎、三ノ輪、瓦町、仁連木の6村が合併してできた村で、その豊岡をとって校名とした。



豊岡中学校校章

(3) 特色ある活動

① プロジェクトF

月に1〜3回ほど実施している生徒集会の名称。企画・運営は生徒会役員が担当する。

平成17年度（2005）は、「素直に自己実現できる学校」を目標に、学級発表を行った。内容として、「学級目標がどの程度意識できているかを発表する」「全員が1度は声を出



クラス一丸となって取り組む 合唱コンクール

す」という条件をつけ、これによって、学級としての意識を高め、一人ひとりが自分を素直に表現できるきっかけづくりとした。

② ホリボラ

平成13年度（2001）から始まった活動で、ホリデーボランティア（休日のボランティア活動）を略した言葉。当時の生徒会執行部の考案で、17年度で4年目を迎えた。

17年度の活動内容は、地域の公園清掃、朝倉川の清掃、パキスタン地震復興支援募金活動を実施した。

休日に実施した地域の6つの公園清掃活動、また、朝倉川に入って泥だらけになり掃除する姿、さらに、大きな声で募金を呼びかける生徒に「がんばってるね」「ご苦労様」と行き交う人々から声をかけられ、豊岡中学校の生徒のさわやかさが市内に広まった。参加した生徒たちもやりがいを感じ、充実感を味わうことができた。



保育園児との交流

③ 生き生きフェスティバル

平成16年度（2004）からスタートした企画で、別名「豊岡万博」。従来の学級企画から全学年で実施、参加する行事である。保育園児を招き、楽しんでもらおうという内容だ。

平成17年度は、岩田保育園の園児を招待して楽しんでもらおうと企画した。

1年生は、園児一人ひとりに付き添い、手

作りのカバンをプレゼントして校内を案内した。2・3年生は、宝さがしをしたり、折り紙を教えたり、粘土あそびをするなど、園児を楽しませるような企画を作り、園児の笑顔を誘い、両者ともに温かな空気に包まれた。

3 春日保育園

(1) 春日保育園の誕生

就学前の乳幼児を預かる施設として、豊校区には「春日保育園」がある。

戦後、豊橋市の復興計画も順調に進んでいく中、就学前の幼稚園や保育園への財政的支援は義務教育段階に力点を置くのに精一杯な時期があった。そこで、各校区の総代会やお寺などの篤志家たちが就学前の子どもたちの託児や保育の世話を一手に引き受けていた。

豊校区も、かつては岩田校区内にある岩田保育園や近辺の幼稚園に通園する乳幼児が多かった。岩田保育園も設置当初は、琴平神社で保育をしたり、また、岩田小学校の校長が園長を兼ねたり、小学校の先生も保育に携わった時期もあったという。

その後、入園希望者が増加し、また、周辺の保育園や幼稚園だけでは、希望者を充たすことができなくなったので、就学前の子どもたちの施設をたちあげようと、当時の総代会や地域の協力のもとに、昭和50年（1975）4月、社会福祉法人として春日保育園がスタートした。

(2) 保育園の機能

保育園は家庭で育児が困難である保護者を対象に、原則として午前8時から午後4時まで、土曜日は午前中、就学前の乳幼児（6か月ぐらいから小学校入学前）を受け入れている。しかし、今日では、終日、勤務しなければならぬ保護者などを対象に、特別保育事



春日保育園

業の一環として、平日は午前7時30分から午後7時、土曜日は午前7時30分から午後1時まで延長保育も実施している。

(3) 定員

近年、特に働く女性の増加とともに保育園への入園希望が高まり、定員の15%増、5月以降は25%増まで受け入れ可能となった。

開園当初、120名の定員でスタートした春日保育園も、園児の増減で定員も変わってきたが、平成9年（1997）4月より、150名となって今日まで続いている。

平成18年（2006）4月1日、現在の園児数は下記のとおりである。

年齢	0	1	2	3	4	5～	計
人数	3	12	29	38	36	49	167

(4) 保育の内容

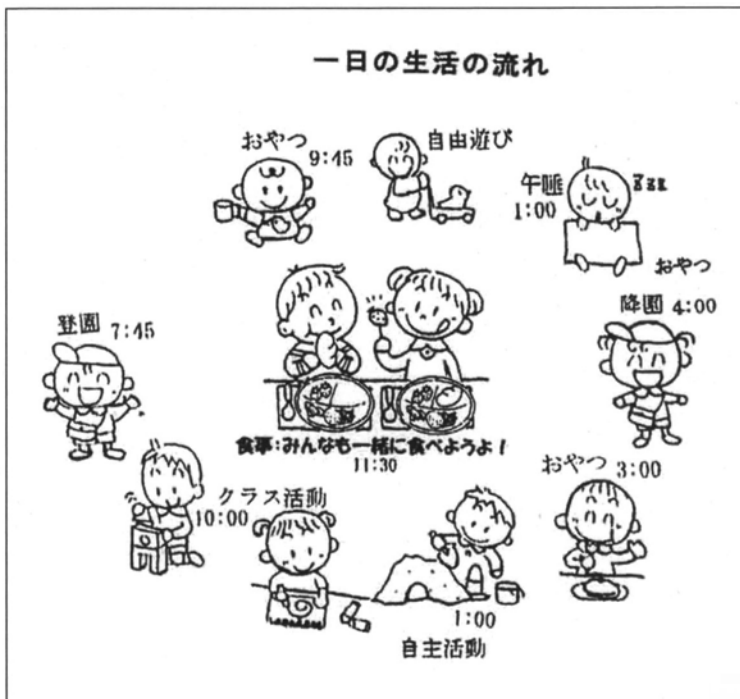
保育園は、国が示した保育指針に基づき年齢に応じた保育を進めている。幼稚園との比較は難しいところもあるが、学校教育における勉強という形態はとっていない。しかし、様々な活動を通して、養護と教育が相互に関連した保育を実施している。

保育園の一日は保護者に連れられて乳幼児が随時、登園したところから始まる。子ども達がそろったところで、クラスごとに個々の健康観察及び家庭からの連絡を受け、所持品

の始末をする。クラスごとに健康観察。その後、室内や園庭などでの遊びが中心となる。その他、読み聞かせや作品製作、リズム遊びなど、乳幼児の健やかな成長のために様々な活動を取り入れている。

乳児には午前中、おやつタイムがあり、昼は、保育園で作る給食を食べる。

午後は、乳児は午睡。夏場は幼児も午睡。幼児は、遊びを中心とした自主活動。午後3時にはおやつを食べ、その後は随時お帰りとなるが、午後7時までは子どもを預かっている。



(5) 主な年間行事

4月～8月	入園式 遠足 健康診断 (秋も) 歯科検診 保育参観 七夕会 プール 個人懇談 夏まつり
9月～12月	防災訓練 運動会 親子遠足 交通児童館見学 生活発表会 観劇 もちつき クリスマス
1月～3月	マラソン 豆まき ひなまつり お別れ遠足 卒園式
毎月	誕生会 避難訓練・防災訓練 交通安全指導 身体測定

(6) 特別保育事業

春日保育園では、入所者のニーズに応え、支援するためにさまざまな特別保育を実施し、地域に開かれた保育園を目指している。

○時間延長保育

朝の午前7時30分より夜の午後7時まで子どもを受け入れている。

ただし、長時間利用料が必要。

○障害児保育

発達の遅れなどのある子どもを受け入れ、健常児と一緒に保育している。

○一時保育

保護者が病気とか葬式などの際で、一時的に預かる一時保育を実施している。

○世代間交流保育

老人会との交流やデイケアセンターへの訪問を通しての世代間交流を実施している。

○子育て支援地域活動

毎週木曜日、園庭や遊戯室を開放して保育園に通っていない子どもを対象とした活動を実施している。

4 社会教育

(1) 豊岡地区市民館

① 地区市民館構想

昭和40年代（1965）以降、高度経済成長期を迎えた豊橋市は、市民を取り巻く社会環境の急激な変化に対応するため、文化都市にふさわしい施設・機能をもった環境整備の充実を図った。その施策の一つが、各中学校区ごとに一館を建設する地区市民館構想である。

二川地区市民館が、第1号として昭和49年（1974）に開館して以来、各中学校区で建設が進められた。

豊岡地区市民館は、岩田第一土地区画整理事業が進行する中で優先的に建設された。ここには、大集会室・図書談話室・高齢者室・和室などがあり、高齢者や女性を対象とした教室を開催するなど、地域コミュニティセンターとしての役割を果たしてきた。

また、昭和54年（1979）から各小学校ごとに校区市民館を建設し、地域住民の生活に密着した生涯学習施設として貢献してきた。

② 地区市民館の建設

市所有地の溜池「西の山池」は、一旦は豊橋市名義で換地したが、岩田第一土地区画整理組合が保留地処分により資金計画の大幅な変更を行い、地域社会の福利増進を目的とする岩田地区市民館の建設を決定、「西の山池」の換地を小学校用地（豊小）の中に移し、その跡地へ岩田地区市民館を建設したのである。

昭和50年（1975）4月1日、組合事務所を除く建物の総てを市に移管した。以来、地域社会の社会教育の拠点として活動している。

工事着工 昭和49年2月20日
竣工 昭和49年8月15日



豊岡地区市民館

こうした過程を経て、昭和50年（1975）4月1日より岩田地区市民館として産声をあげる。平成元年（1989）4月1日から豊岡地区市民館に改称、現在に至っている。

③ 目的と運営形態

市民館は、地域住民のために、生活に即した教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、住民の教養の向上、健康の増進、情報の共有化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的としている。

○部屋構成

第1和室（44畳）・第2和室（35畳）
集会室（150人）・兼実習室（調理台5台）
専用室（20畳、地域住民専用）

○利用時間

・午前……9：00～12：00
・午後……13：00～16：00
・夜間……17：00～21：00

④ 主な市民館主催事業

- ①市民館講座（2講座）
- ②親子ふれあい教室
- ③幼児ふれあい教室
- ④家庭教育講座
- ⑤市民大学トラム
- ⑥高齢者セミナー
- ⑦市民館まつり兼豊校区文化祭



幼児教室



3B体操



高齢者セミナー



子ども生け花

⑤ 自主サークル活動

サークル活動・研修会など生涯学習の場として活用されている。平成17年（2005）8月現在、45のサークルが毎週・隔週・月1回とサークルによって様々であるが、同じ趣味を持つ者同士が楽しく活動をしている。

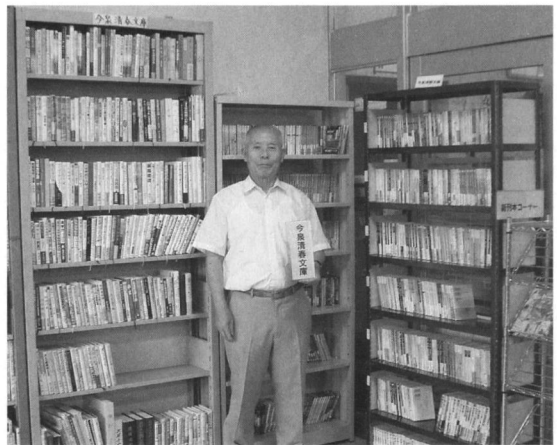


水墨画教室

⑥ 今泉文庫

豊岡地区市民館には豊校区に住む今泉清春氏の寄贈による今泉文庫がある。

平成17年（2005）12月現在で1,040冊の本が寄贈され、本を借りる人が後を絶たないほど喜ばれ、愛読されている。



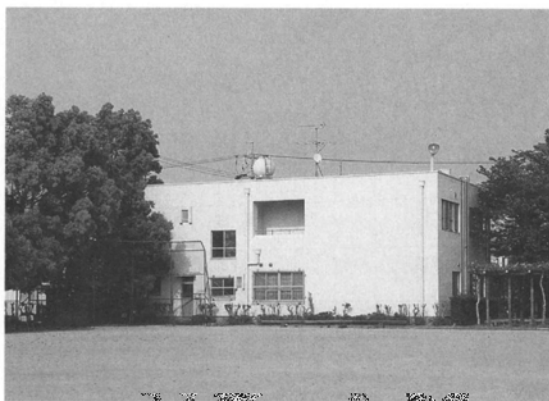
今泉文庫

(2) 豊校区市民館

豊校区市民館は、豊小学校運動場東北側に建設され、昭和57年（1982）5月に開館された。

今日では、校区のコミュニティの場及び生涯学習の場として、地域の文化向上に大いに貢献している。

項目	内容
開館時間	4月～9月 12時30分～17時30分 10月～3月 12時～17時
休館日	月曜日 祝日 年末年始
施設	和室 集会室 児童室 図書談話室
利用者	学校・PTA関係 校区総代会 校区内各種団体
自主グループ	ダンス同好会 着物着付け 民謡同好会 絵画同好会 短歌同好会 大正琴 子どもサッカークラブ
市民館主催事業	いきいき子育て促進事業 太鼓教室 お話し会 押し花教室 昔の遊び 抹茶の飲み方



豊校区市民館

(3) 社会教育委員活動

豊橋市の各校区には、社会教育委員が設置されており、豊校区も三ノ輪本町、三ノ輪二区、三ノ輪三区、春日町、西岩田の五つのブロックから男女各1名ずつの委員を推薦して、10名で構成されている。

活動状況は、校区総代会及び各種団体が主催する行事に参加して、校区内の親睦、融和を図りつつ、校区民の知識と教養が高まるよう尽力している。

社会教育委員会が主催する行事は多くあるが、中でも大きなものは、校区民の親睦を目的とする研修旅行（日帰り旅行）、文化祭、成人式の三大大行事である。

① 研修旅行

研修旅行は、校区民の知識と教養を高めるとともに、親睦を目的として毎年7月に行っている。

研修地は、前年の12月頃から少しずつ情報を集めだし、3月頃には研修内容、その研修に即した目的地の選定、校区民が多く参加できるような日程などを10名の社会教育委員が集まり、立案から企画の決定、実施までを行っている。

企画決定の際には、総代会を通して、各校区民に周知できるよう回覧板により参加者を募集している。



研修旅行

すでに10回を超す研修旅行をしているが、最近3年間の研修旅行を紹介する。

平成15年(2003)は、知多半島周辺、平成16年(2004)は、宇治平等院・東大寺、平成17年(2005)は、別名鈴虫寺と呼ばれている華嚴寺と鞍馬山である。

毎年90名前後の参加者が2台のバスに分乗して実施しているが、車中や目的地では新たなコミュニケーションが生まれ、楽しく有意義な一日が過ごせたと喜ばれている。

② 文化祭

11月の第1土曜日・日曜日に、校区民の日頃の研さん・趣味・才能を披露する行事として文化祭を催している。

この行事の企画運営は、校区の社会教育委員が中心となって、地区市民館運営委員の指導を得て開催している。

校区民の日頃の研さん結果が一堂に展示され、生け花、水彩・油絵・日本画といった絵画、書、編み物、陶芸、手芸などが、生徒や児童の作品を含め老若男女、年齢を問わず出品される。出品者数は、年々増えているが、最近では180名を越すほどとなっている。

作品は2日間の開催期間中展示され、日曜日には芸能発表会も開かれる。喉自慢の歌い手をはじめ、日舞、ダンス、大正琴の演奏、詩吟、カラオケなど、日頃、市民館活動を通



文化祭

じて学んだ学習成果を発表する場として、相当な活況を得ている。

なお、芸能発表会の出演者は年々増えており、常時80名を超えている。

③ 成人式

校区社会教育委員会の最大の行事が成人式である。

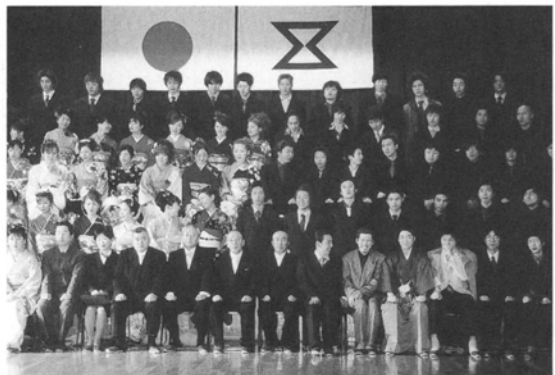
校区総代会の協力を得て、企画運営する行事である。運営は、社会教育委員会が独自に企画し、市議会議員、校区総代会の各町総代、各種団体長及び小中学校校長、成人式を迎える若者の小学校6年生時代の担任(恩師)を迎えて、盛大に催す行事である。

豊校区の成人式は、昭和55年(1980)を第1回として毎年、祝日である1月15日に行ってきたが、平成16年(2004)からは成人の日の前日の日曜日に開催するようになった。

式典は、豊小学校体育館で挙行し、新成人の前途を祝福、かつ、激励している。

式典終了後には、全員で記念写真を撮り、懇話会では恩師を囲んで長い時間を思い出話で楽しんでいる。

豊校区の新成人の数は、毎年100名を超えているが、ここ数年、巷で報道されているような成人式のトラブルはなく、式典は終始和やかなムードで行われている。



成人式

豊校区スポットライト 7

一閑陶苑はじめ窯

教員退職後、瀬戸等で指導を受けた故鳥居孝一（一閑）が、昭和56（1981）年6月に仲ノ町の自宅西20㎡の土地を借り、陶房を建て、ガス窯を設け、一閑陶苑はじめ窯と命名し、陶友（会員）10名とともに陶芸を始めた。

窯の命名に当たっては「常に初心を忘れず、仲よくお互いに陶芸を楽しむ者同士が集う窯にしたい」という主宰一閑の思いがあった。当時はまだ陶芸人口は少なく、ましてや窯を設け、作陶している人は、豊橋にはほとんどいなかった。

はじめ窯で使用する粘土のほとんどは、信楽、美濃、常滑の土であったが、渥美をはじめこの地方にも古窯の歴史があるため、地元の土の焼成テストも再三行ったが、地元の土は高温に弱く、焼くと形が崩れるので、使用

する際には主として信楽の土とブレンドして作品づくりが行われた。

作品にかける釉薬は、黄瀬戸、織部、志野と様々であるが、市内小島町の梨の木を焼やした灰を陶房のダルマストーブで作り、それを釉薬として使用した。その際、発色がよい土づくりのための焼成テストを幾度となく繰り返し、ヒスイ色に焼き上がる土作りを確立した。

平成15年（2003）5月に一閑陶苑はじめ窯を仲ノ町の自宅に移し、新調したガス窯で新生の陶房を開窯した。

以前と比べ焼成回数は減ったが、作品をサヤの中に入れて焼き、薪で焼いた信楽風の味を出す焼成方法や、火山灰と梨灰を同時に生かした焼成方法も新たに加えて経営を続けている。

豊校区町総代一覧（昭和54年4月1日～平成18年4月1日）

三ノ輪本町	三ノ輪二区	三ノ輪三区	西 岩 田	春 日
岩附正雄 昭和63年まで	藤原昇一 昭和58年まで	中村政吉 昭和55年まで	中野春次 昭和55年まで	今泉清春 昭和55年まで
	大竹 光 昭和62年まで	村田第二 昭和59年まで	萩本一雄 昭和56年まで	佐原政治 昭和58年まで
山内 進 平成3年まで		渥美由秋 昭和62年まで	萩本信行 平成6年まで	小早川清 昭和61年まで
	浅井 伉 平成7年まで	水野昭郎 平成2年まで		佐原政治 昭和63年まで
安達武至 平成元年から		藤原正利 平成11年まで	原田武雄 平成5年まで	斎竹 保 (昭和64年)
	近藤信男 平成7年まで		佐原政治 平成3年まで	
	浅井由崇 平成14年まで	村松 保 平成12年まで	今泉清春 (平成4年)	
	杉浦貞充 平成15年から	尾崎 聡 平成13年から	安藤久雄 平成7年から	夏目正彦 平成6年まで
				今泉卓三 (平成7年)
				白井広司 平成8年から

参 考 文 献

よはしの歴史 豊橋市消防50年史 ふるさとの思い出写真集 —明治大正昭和豊橋— 中日新聞 豊岡村是	豊橋市史編集委員会 豊橋市消防本部 鈴木源一郎 中日新聞社 渥美郡農会幹事 宮林桂次郎 豊橋の民話を語りつぐ会 永井 進 豊橋市立豊小学校 豊橋市立豊小学校 豊橋市立豊小学校 豊橋市史編集委員会 東日新聞	豊橋の町名の変遷 地方都市の研究 —新しい豊橋— 朝日新聞 西岩田のあゆみ とよおか誌 とよおか20周年記念誌 豊岡30年史 とよおか50周年記念誌 郷土資料いわた 岩田小学校百年 向山東町20年のあゆみ 豊橋筆の変革	吉川利明 伊藤郷平 朝日新聞社 豊橋市岩田第1土地 区画整理組合 豊橋市立豊岡中学校 豊橋市立豊岡中学校 豊橋市立豊岡中学校 豊橋市立豊岡中学校 豊橋市立岩田小学校 豊橋市立岩田小学校 向山東町 杉浦良雄
--	--	---	--

編 集 後 記

豊橋市制100周年にあたり、校区に住む多くの方々が地元の歴史に学び、地域を誇りに思い、育てていくためにも本書の刊行は時宜を得た企画であります。私たち編集委員は、この意義のある事業の一端に携わること光栄に思うと同時に、その責任の重さに身の引き締まる思いで、次のような編集の基本方針を確認しました。

1. 中学生以上の方々なら気軽に読めるよう、平易な記述に努める。
2. 校区の歴史は浅いが、それ以前の先人の歩んだ道すじを含めた内容にまとめる。

私たちは、可能な限り正確な記述を記し、編纂したつもりですが、編集委員の力量にも限界があり、地域の方がたのご高覧に耐える校区史にしえたか否か、不安が残ります。

しかし、本書をきっかけに校区の方々が郷土により深い関心を持たれるならば、編集委員一同心からの喜びとするものであります。不行き届きな箇所もあろうかと思ひます。ご叱正を頂きたく存じます。

末筆となりましたが、豊校区史編纂にあたり、執筆者をはじめ資料提供、執筆内容の校閲を賜った関係各位に対し、衷心からお礼申し上げます。

編集委員一同

豊校区史編集委員

編集委員

安達 武至 今泉 清春 岩瀬 篤 安藤 久雄 白井 広司 尾崎 聡
杉浦 貞充 小松 博一 鳥居 陽 鈴木 友之 中野 輝男 鎌田 孝一

豊校区史豊橋市サポーター

伊藤 尚生 広田 哲明 村山 大介

(順不同敬称略)

校区のあゆみ 豊

平成18年12月25日発行

編 集 豊校区総代会
豊校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 髷 きょうせい





2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋